

---

# 緋弾のARIA バレットダンサーズ

シェリーカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア バレットダンサーズ

### 【Nコード】

N1644V

### 【作者名】

シェリーカ

### 【あらすじ】

特殊部隊TF141の隊員であると同時に、東京武偵高校の生徒でもある少年、矢崎影明。武偵として、TF141のメンバーとして、イ・ウーを追うことになる。特殊能力を持つ敵に能力を持たない彼はどう立ち向かうのか、緋弾のアリア バレットダンサーズ開幕！ 駄文ですがよろしく願います！

## 第0話 オンリーイージーデイ(前書き)

初めての方は初めまして、久しぶりの方はお久しぶりです。シェアリーカです。諸事情により削除されてしまったIS Before Storyですが、新しく、緋弾のアリアを書くことにしました。改めてよろしく願います。では、第0話どうぞ！

## 第0話 オンリーイージーデイ

20XX年 北海洋上 第11採油プラント

2日前、テロリストが洋上に浮かぶ石油プラントを制圧、中にいた作業員を人質に立て籠もった。ただの立て籠もりなら英国武偵局の武偵でカタをつけられたのだが、プラントを制圧したグループは元軍人だったため投入した武偵が逆に人質として捉えられてしまう。事態を重く見たイギリス政府は国連、米国政府に打診、イギリスSAS、アメリカ海兵隊、ネイビーSEALSなど、世界中から精鋭が集められた特殊部隊「タスクフォース141（通称TF141）」を動員して事態の解決に乗り出した。

3月29日 採油プラント近海 4：02

海中を進む米国海軍のロサンゼルス級原子力潜水艦『シカゴ』。そののセイル後方にあるDDSにある部隊が搭乗していた。

ちなみに、ドライデッキ・シエルターとは、潜水艦が潜行状態において、ダイバーの容易な出入艦を可能にするエアロックと、小型潜水艇などの格納庫を組み合わせた潜水艦に着脱可能なモジュールで、今回ここにはSEAL輸送潜水艇（SDV）を格納している。

『USSシカゴ指揮官より水密格納庫へ、作戦開始だ』

「水密格納庫注水完了、減圧……久しぶりだからって緊張するなよジョーカー」

「大丈夫ですって、大尉」

このSDVに乗っているメンバーの中にひとときわ若いメンバーが居る、まだ、16か15くらいの少年だ。彼の名は矢崎やまき景明このTF141の中では最年少のメンバーだ。

『チーム1、SDV発進』

潜水艦の艦長の声と共にハッチが開く、海中をSDVが静かに進んでいく。

「そついやジョーカー、学校はいつからだ？」

「4月の・・・何時だったっけ。忘れました」

彼とインカムで話しているのはTF141の隊員の1人ゲイリー・“ローチ”サンダーソン軍曹、にとっては兄のような人だ、中学2年の時にSASにオブザーバーとして参加していた父が亡くなった後、SAS、TF141の隊員達は厳しく鍛えながらも景明を育てた。彼が東京武偵校に入学してもよく連絡を取り合っているし、こうして作戦に参加することもある。

「ローチ、ジョーカー、少し静かにしてるもうすぐ作戦開始だぞ」

通信中の2人に話しかけてきたのは、ソープ・マクダヴィツユ大尉、ある大物武器商人の逮捕による功績で軍曹から大尉にまで昇進した人物でTF141の指揮官をしている。

「まあまあ、ローチだって久しぶりで嬉しいんだろっ、俺だってこうして会うのは3ヶ月ぶりなんだぜ」

マクダヴィツシユ大尉の通信に入ってきたのは、口元を骸骨のバラクラバで覆いサングラスを掛けた男・・ゴーストだ。意外と気さくな人でTF141のムードメーカーだったりする。

「まあいい、もうすぐ作戦開始だ、切り替えるよ」

「了解」

暫くするとSDVは採油プラントの下に来た。ここでSDVから離れて海上にむかって泳ぐ。別の原子力潜水艦から出撃したチーム2も到着したらしい、ゴーストが『上へ』のジエスチャーをする。それにあわせてチーム1全員が泳ぎ始めた。景明の装備はACU迷彩のBDU《野戦服》にタクティカルベスト、リュックサックに軍用ロングブーツという装備で、その上から酸素ボンベとゴーグルを装備している。

海面に出るともう石油プラントの中だった、最下層には警備の兵が2人、楽しく談笑している。

「位置に着きました、合図を頼みます」

「ジョーカー、やれ」

「了解」

そう言うと景明は警備の兵士の服を掴んで海中に引きずり込んだ。まさか海の中から来るとは想定外だったのだろう。あっさりと倒すことができた、武偵なら基本的には犯罪者は殺さず、逮捕が基本だが今の景明はTF141の一員なので殺すことに躊躇いはしない。兵士が海底へと沈んでいく、チーム1のメンバーに引き上げられて石油プラントに上陸。ボンベとゴーグルを外して防水ケースに入れていた銃を取り出した。

今回景明が使うのはレミントンACR。このACRはもともとマ  
グプル社が2007年に開発した、マグプルMASADAという銃  
が原型なのだが、MASADAは発表後まもなく、AR15系ク  
ロインで有名なブッシュマスター社が、製造・販売権を買い取り、「  
ブッシュマスターACR」として販売される予定になった。しかし、  
その後ブッシュマスターと同資本下にあるレミントン社も供給元と  
して名乗りを挙げ、前者は民間市場にセミオートオナーの製品を、  
後者は「レミントンACR」の名で、軍・法執行機関向けにフルオ  
ート射撃が可能な製品を供給することとなって、そのうちの1つが  
彼の手にあるというわけだ。

ACRのレイルスシステムにはホログラフィックサイトとフラッシ  
ユライト一体型フォアグリップ、サプレッサー減音器、レーザーポインターを装  
備している、サイドアームはスイスの銃器メーカーSIG社が開発  
したハンドガン、シグザウエルSP2022をサイドホルスターに  
収納している。いつもは別の銃を使っているのだが今回はこれにし  
た。

「行くぞ、一瞬たりとも気を抜くな」

マクダヴィツシュ大尉と共に前進を開始する。

「いたぞ、手すりの向こうだ」

「自由に撃て、サプレッサーを忘れるな」

ジョーカーとゴーストが撃つ、それと同時にペットボトルから空  
気が抜けるような音がした、減音器・・・サイレンサー越しの銃声  
だ。哨兵が2人倒れた。

「付近に人質がいる、誤射に注意しろ」

潜水艦の司令官がそう伝えてきた。近くに扉がある、ここに人質

がいるらしい。ドアに突入用のフレーム爆薬を仕掛ける、ドアが吹き飛ぶと同時に突入した。1人・・・2人・・・3人・・・4人・・・ヘッドショットで4人を倒す。

「クリア」

「こっちもクリアだ」

ゴーストと大尉の方も終わっただらしい。

『人質はチーム2が救助する。最上階まで搜索し、残りの人質を救助しろ』

「了解」

「了解」

「了解だ・・・腕は鈍ってないなジョーカー」

そう言ってジョーカーとローチは上へと搜索に向かう。

『周囲を敵のヘリが警戒中だ、見つかるなよ』

潜水艦の司令官がそう伝えてくる。

「了解、見つかるなよ」

大尉がそう言った数秒後、ヘリが通り過ぎていった。

『近くに人質がいるぞ、注意しろ』



暫く行くと、詰め所のような建物があった、どうやらあそこにも人質がいるらしい。

「行くぞ」

「了解」

ジョーカーが、フレーム爆薬でドアを吹き飛ばす。突入開始、同時に大尉も突入した。数秒で、5人倒すことに成功する。だが……

「敵の無線だ……お客様がおいでだぞ」

どうやら定時報告の前だったらしい、今ので異常に気付いたようだ。

「プランBで行くぞ、死体にC4を仕掛ける」

大尉の指示に従って、倒した敵にC4を仕掛ける。人質は既にチーム2に引き渡した後だ。

「高所にまわれ、死体をエサに奴らをおびき寄せる」

大尉、ゴーストと共に、3人は詰め所を出て、近くの梯子を登った先の足場に伏せる。案の定、兵士がやってきた。数は10人程。

「パトロールだ。接近するまで発砲するな」

「了解」

パトロールの兵士達が詰め所に入ったところでC4を起爆させる。詰め所から炎が盛大に吹き上がる。

「こちらホテル6、敵に見つかった」

『了解、情報によると人質は上部デッキの様、爆発物反応あり、君らが目標を確保したらSAM（地对空ミサイル）破壊のため増援を送る。オーバー』

「了解、着陸地点“ブラボー”から脱出する」

そう言つて、足場から降りて行動再開。

「ジョーカー、中央軍の指示だ、海兵隊員を送り込めるよう上部デッキを制圧する、行くぞ！」

そう言つて、大尉を先頭に上部デッキへと繋がる階段目指して彼らは進んでいく。銃声に引き寄せられて、次々と敵兵がやってきた。たちまち銃撃戦の幕が開く、が、相手は軍人崩れのテロリスト。対するこっちは世界最強の特殊部隊、力の差は比べるまでもない。

「12時方向に目標！」

TF141のメンバーから入った通信を頼りに敵の姿を探す、すぐに見つかった。銃撃開始、すぐに倒れるテロリスト、燃料タンクの陰に隠れて撃つてきている兵士に対しては、燃料タンクを爆発させて兵士を吹き飛ばす。おおむね戦闘は順調に進んでいたが・・・

「前方に攻撃ヘリだ、隠れる！！」

ゴーストがそう言ったと同時にヘリが現れた、旧式の攻撃ヘリだが、歩兵にとつては旧式でも十分脅威だ。側面に装備されたM134ミニガンが火を噴く。採油プラントの壁に次々と弾痕が穿たれる。

「重火器で撃ち落とせ！」

大尉が叫ぶのと同時にジョーカーがミニガンの攻撃をかいくぐって敵が装備していたステインガーマサイルを奪う、弾頭が入っているのを確認してから照準器を起こして、ヘリを狙って発射。見事に命中した。炎を上げながら海へと落ちていく。

「敵ヘリ撃墜、いい腕だ」

「さすがだな。腕は鈍ってないらしい」

ゴーストとTF141のメンバーであるスケアクロウが褒められた。

「時間がない、上に出て残りの人質を確保する。海兵隊を呼ぶのはそれからだ」

大尉がそう言うって進んでいく。それに続くジョーカー達。いよいよ上部デッキに出た。敵の抵抗も激しくなっている。

「グレネード！」

先行していたTF141の隊員がそう告げる。それと同時にジョーカーとローチがグレネードを投げた。数秒後、グレネードが爆発、破片をもらって敵兵が次々と倒れていく。

「敵の側面に回りこめ！」

最後の人質がいると思われる部屋の前で、敵の指揮官らしき男が叫んでいるのが見えた。

「マクダヴィツシュ大尉！指揮官はどうします！？」

「生け捕りにしろ！」

「了解！」

ジョーカーが遮蔽物から身を出して、ACRで指揮官の手足を的確に撃ち抜いた。周囲の敵兵はゴーストやローチがあらかた片付けたらしい。最後の人質がいると思われる部屋のドアにフレーム爆薬をセットしていた。指揮官に軍用の手錠をかけてからジョーカーと大尉もそっちに向かう、フレーム爆薬が爆発、ドアが吹き飛んでTF141の隊員が突入。ローチが2人、ゴーストも2人、ジョーカーも2人、計6人が瞬く間に倒された。

「クリア、最後の人質を確保」

部屋の中には作業員の他にロンドン武偵局のバッジをつけた者もいた、どうやら彼らが先に突入してテロリストに捕まった武偵らしい。

『USS指揮官了解、直ちに制空権確保のため海兵隊を送り込む。TF141は着陸地点ブラボーに移動されたし』

「了解」

そう言つて、TF141のメンバーは採油プラントにあるヘリポートへと向かう。同時に海兵隊のUH-60Lブラックホークがやってきた。キャビンから次々に海兵隊員が出てくる。

「ジョーカー、さっきの人質を忘れるなよ」

「へーい」

先刻確保したテロリストの指揮官らしき男をブラックホークに乗せる、こうして、採油プラントの戦闘は終わった、今回の作戦でTF141は一人の死傷者を出すことなく任務を完了、連度の高さを改めて知らしめることになった。

イギリス、ロンドン武偵局 9：42

その後、TF141の面々は無事にイギリスに帰ってきた、ここに来たのは捕まえた人質をロンドン武偵局に引き渡すためだ。スーツや、ブレザーを着た武偵達の中ではTF141は浮く、第一、軍人であるTF141と民間人である武偵では纏う雰囲気が違う。武偵は基本的に犯人を逮捕するのが基本方針だがTF141の場合は殺すことも少なくない。そこが彼らとの違いとも言える。

「相変わらず浮いてますね大尉」

「まあ、仕方ないといえば仕方ないな。引渡し場所はあるのか」

制圧作戦時に生け捕りにした指揮官をロンドン武偵局の武偵に引き渡す。ここの武偵局の人間は何かにつけて自分達のの成果にしたがる、この件も数週間して事件の報告書ができたときには採油プラントを制圧したのはTF141ではなくロンドン武偵局の成果にな

っていることだろう。

「またこの成果も横取りされるんでしょうね・・・はあ」

「そう落ち込むなよジョーカー、いつものことだ」

ゴーストがそういつて笑う。

「ま、そうですよね」

「そうだけ、気にしたってしょうがない。今日はどうする、作戦成功記念パーティーやるか？」

ローチが大尉に尋ねる。

「そうだな、とりあえず酒と食材買って来るように指示するか」

PDAを取り出してTF141のメンバーにそう伝える大尉。

「俺達はどうします?」

「ゴースト、お前にはローチとジョーカー連れて一緒にメシ買ってこい」

「了解・・・おい、ジョーカー、買い出しに行くぞー!」

大尉やローチが呼んでいたので、その後を追うジョーカーだった。

3月30日 ロンドン ヒースロー国際空港 19:40

翌日の夕方、景明は日本に戻るためヒーロー空港に向かう。見送りに来たのはローチ、ゴースト他、数名のTF141の隊員達、数えるほどしかない。大尉やそのほかの隊員達は全員二日酔いでグロッキー状態だ。今の彼はTF141のジョーカーではなく、東京武偵高校の武偵、矢崎景明だ。彼の基本的な服はダークスーツに黒のロングコート。ローチ曰く高校生とは思えないほど似合っているらしい。

「それじゃあな、また連絡して来いよ」

「昔、東南アジアには行ったことあるんだが・・・日本は初めてだな」

「アジアのほうで作戦することになったら必ず日本に遊びに行くからな」

「はい、そのときは歓迎しますよ」

「頼むぜジョーカー。それじゃ、元気だな!!」

「はい!」

ロビーから出国ゲートへ向かう景明に手を振るTF141の隊員達、周囲の人々はまさかこんな近くに世界最強の特殊部隊員たちがいるとは思わないだろう。それほど自然に溶け込んでいた。こうして、影明は日本へと帰っていく。

「さて、ついさっきロンドン武偵局からきた情報だ。この前捕まえた指揮官はイ・ウーの兵士ということが判明。そいつの情報から次

のターゲットが決まった。これからTF141の最優先目標は『パトラ』、『ヴラド』、『武偵殺し』、『デュランダル』の4つ、そろそろマクダヴィツシユも起きてるころだ。ジョーカーも日本で何かあつたら情報を送ってくれる、本部に戻るぞ、作戦開始！」

「「「「了解！」「」「」」

影明を見送つた後、ゴーストが新たな目標を伝えた。それと同時に空港に来ていたTF141のメンバーの眼が兵士のそれへと色を変える、TF141の新たな戦いも始まるうとしていた。



第0話 オンリーイージーデイ（後書き）

感想よろしくお願いします！

## 登場人物紹介&設定

主人公：矢崎景明【やざきかげあき】

16歳、身長175

黒の無造作ヘアが特徴的な少年だが、タスクフォース141の最年少隊員にして東京武偵高校2年生、所属科は強襲科アサルト武偵ランクはA。

アサルト強襲科だが、狙撃、運転、情報収集、医療、救助活動、など、T F 141仕込みの多彩なスキルを持つ、現在使用しているのはレミントンACR、M92FSVertec、他にもM82A1バレットを持つていらしいが詳細は不明、近接戦闘では2本の大型軍用サバイバルナイフを使う。愛車はヤマハ・V-MAX（2代目）。1年のころからの友人であるキンジャや武藤、不知火とよくつるんでいる。基本的に私服はスーツに黒の軍用防弾ロングコート、学校にいるときもコートは着ているらしい。所属クラスは2年A組。

設定 その1：タスクフォース141

2016年に起きた空港乱射事件に端を発する一連の事件の首謀者であるウラジミール・マカロフを捕まえるために創設された、イギリスSAS、アメリカ海兵隊、ネイビーSEALSなど、世界中から精鋭が集められた特殊部隊「タスクフォース141（通称TF141）」だったが、激戦の末にマカロフの逮捕に成功、その存在意義はなくなつたかに思えた、だが、世界で頻発する超能力者からの事件に対し部隊の存続が決定。目的をイ・ウーの殲滅、または逮捕という目的に変えて、日夜イ・ウーの動向を追っている。現

在の指揮官はイギリスSASのソープ・マクダヴィツシュ大尉。

## 登場人物紹介&設定(後書き)

感想待っております。それでは！

第1話 いつもの日常（前書き）

本編開始！

## 第1話 いつもの日常

あかりside

新学期が始まってから一週間、のある日の午後の1年A組の授業は射撃演習だった。間宮あかりにとって射撃演習はあまり得意ではない分野だった、とにかく的に当たらない。担当は強襲科《アサルト》の実習を受け持つ蘭豹なので、さぼったら地獄のフルコースが待っている、内容は想像するだけでおそろしい。

「じゃあ、まずは的に向かって撃ってもらうが、その前に手本を見せてやる。矢崎ー！」

「へーい」

そんなやる気のない返事と共に現れたのは武偵高の防弾制服の上に真っ黒な軍用ロングコートを羽織った無造作ヘア・・・というより本当に手を加えていない髪の毛の男子生徒が現れた。

「じゃあ、今からこいつにお前らの武器の実演指導をする」

いま、参加している1年A組の強襲科は全員がM4A1アサルトを持っている、アメリカ軍の主力小銃でもあり、オプションパーツが豊富で扱いやすいM4は武偵高でも使っている生徒が多い。

「うっそ・・・矢崎先輩だ・・・」

「かつこいい・・・！」

参加している女子達が小さな声でささやきあっている。あかりは

同じ強襲科アサルトで友人の火野ライカに尋ねることにした。

「ライカ、矢崎先輩つてだれ？」

「あかり、お前そんなことも知らないのかよ、アリア先輩や不知火先輩に次いで強襲科ゴシじゃ有名な先輩だぞ？」

「どんな人なの？」

「ランクこそAだけど、射撃、ナイフ格闘、狙撃、運転、情報収集、救助活動とか、他にも色々こなせる先輩なんだよ、噂じゃTF141の最年少隊員だつて話だぜ」

「ていーえふ141？」

「世界中から腕利きの特殊部隊隊員を集めた最強の特殊部隊のことだよ・・・と、始まるぞ」

ライカが話を中断して前を見ると蘭豹が説明している最中だった。

「言わせてもらうが、お前らは素人だ、立ったまま撃つても当たらないのは当たり前だ。そんな姿勢で撃つても当たらないし、間抜けにしか見えない、矢崎、見本を見せてやれ」

蘭豹がそう言って景明に撃つように指示する。彼が持っているのも自分たちが使っているのと同じM4だった。影明が的に背を向けて立つ。

(何するんだろう・・・?)

そして、影明が目にもとまらない早さでのの方に振り向いて腰だめで撃った。関係のないところに、弾丸が命中する。

「見たか？弾をばらまいただけ、当たりはしない」

蘭豹がそう言う。あかりは純粹に感動していた、憧れであるアリ先輩や、大抵の女子達が憧れている不知火先輩もすごいが、この先輩も純粹にすごいと思った。後輩に見本を見せるためにわざとへたな撃ち方をしたのだ。

「ターゲットを狙うには、安定した姿勢から慎重にサイトをのぞけばいい。照準後近くに標的があるときはサイトを使うと素早く標的に狙いが定まる。矢崎、後輩にAランクの腕前を見せてやれ」

蘭豹が再び指示すると、景明がM4に装備されているサイトを使つて的を次々と撃つていく、細かいリズムで連射を区切る指きりバースト射撃だ。

「たったこれだけのことだ、ターゲットを倒したいか？ならサイトで狙つて撃つことだ。それじゃ、10分間各自、自由に撃つてみる」

こうして、授業は進んでいく、あかりはマイクロUZI以外の銃で、久しぶりにターゲットに命中させることができた。

## ライカside

10分間の射撃演習が終わると、蘭豹は参加している生徒と景明を連れてグラウンドを掘って作ったピットへと向かった、ここでは走りながら銃を撃つ訓練を行っている他、瞬時に犯罪者と民間人を区別して射撃するための訓練も兼ねている。ピットの周囲には足場



があり、そこから訓練を眺めることができた。強襲科アサルトの生徒が訓練していたが蘭豹が無理矢理追い出していた、相変わらず強引な教師だな、とライカは思う。

「じゃあ、見本を見せるから、矢崎、行け」

「了解」

そう言って、ピットにはいる、蘭豹がホイッスルを鳴らすと同時に先輩が走り出した、ターゲットが次々と出てくる、銃を持っているターゲットと、銃を持っていないターゲットの二つで、瞬時に判別するのは難しいが・・・

(すつげえ・・・一発も誤射してない・・・とにかく素早く、ミス無くやれってプログラムされた、走る銃座みてえだ・・・！)

ライカが見ている内に景明は2階へと登る、犯罪者と民間人を見分けて2階から1階へ飛び降りる、銃撃とランニングを同時に行つて、ゴールへとたどり着く。

「ほい、タイムは・・・35秒、また上がったな」

「ありがとうございます、先生」

そう言って地上へ上がってくる景明。

「それじゃ、各自残りの時間使ってやっつけ、矢崎、タイマー頼むわ」

「先生はどちらへ？」

「だるくなった、ちょっと職員室に戻る」

そう言っつて、職員室へと帰っていく蘭豹、相変わらず勝手な教師だとおもいつつライカはM4を持って、スタートラインに立つ、ライカの成績はターゲットには全弾命中、民間人への誤射が3回、少しでもクラスの中では少ない方だ、ゴールから地上に戻ってくると、影明がスマートフォンを取り出して通信している。そのとき、グラウンドを車輜科ロジと強襲科アサルトのハンヴィーが走ってくるのが見えた、何かあつたらしい。

「おい、景明！乗ってくれ！」

「どうした、何が起きた？」

慌てている強襲科の2年生と冷静な影明のやりとりが聞こえてくる。

「奴ら仮設橋を吹っ飛ばした！出撃だ！」

ここ最近都内を騒がせている過激派の宗教団体が近くで建設している橋を吹き飛ばしたらしい。依頼にも、この橋の護衛に関する物が出ていたのをライカは思い出す。

「武藤を呼んで、車輜科ロジにある中古の架橋戦車を持って来させてくれ、そもそもこの件には別の強襲科アサルトの連中が行つてたはずだろ？」

景明がそう言つと、ハンヴィーの無線を担当している生徒・・・  
おそらく情報科インフォレマの生徒が答えた。

「先行して警備してた連中と強襲科アサルトの第1派が対岸のレッドゾーンで足止めを食らってる！連絡も途絶えた！」

「それはまずいな・・・判った、俺は装備を整えてから武藤スデと衛生科イカ、狙撃科スナイプのメンバーと一緒に現場に向かう、先に現場に向かつてくれ」

ときばきと指示を出していく景明。ハンヴィーが校門から出て行くのを見送るとライカ達の方を振り向いて申し訳なさそうに言った。

「悪いな1年生、授業はここまでだ。各自教室に戻ってくれ、以上！」

そう言つと同時に景明は走り出した、おそらく装備科アムドに装備を取りに行くんだらうとライカは推測した、走っていく背中を見ながら、彼女は思う。

(アタシも・・・いつかあんな武偵になってみせる・・・！)

ライカは周囲を気にして、声には出さず、その燃えるような思いを静かに胸の中で思った。

## 第1話 いつもの日常（後書き）

AAのキャラ上手く書けているかどうか心配です。さて次回は本格的な戦闘シーン、本来なら、銀行強盗レベルで済ませる予定だったのですが・・・どうしてこうなったんだろう、本格的な戦争のおいがる・・・、ということでも次回も楽しみにしておいてください。感想お待ちしております。それでは！！

## 第2話 いつもの戦場

武偵高 アサルト 強襲科 14:26

景明がタクティカルベストを装備して、強襲科アサルトの装備が置かれて  
いる部屋に向かう、強襲科アサルトには銃を使う生徒一人一人に専用のガン  
ロッカーが与えられる。その中から取り出したのはレミントンAC  
R。口径は5.56mm。専用のガンケースに入れてから、サイド  
アームであるM92FS Verrecをホルスターに収納する。  
M92にはレーザーポインターを装着済みだ。そこから装備科アムドに立  
ち寄ってACR用のマガジンとM92用のマガジンを受け取る。マ  
ガジンはすべてベストのポーチに入れて、右耳に武偵高で作戦のと  
きに使うインカムを装備したら準備完了だ。

「武藤！架橋戦車の準備は出来てるか？！」

『いつでもいいぜ！』

「頼むぞ、俺ももうすぐそっちに合流する、おいていくなよ？」

そういつて装備科からグラウンドに出る、すでにグラウンドには  
狙撃科スナイプと強襲科アサルトの生徒が装備を整えて車両科ロジのハンヴィーに乗り込  
んでいるところだった。ハンヴィーにはM2重機関銃と、増加装甲  
が取り付けられている。

「ここがイラクに思えるな・・・」

そういつて、景明はハンヴィーの一台に乗り込んだ。さあ、今日  
も仕事が始まる。

現場である橋に着いたとき、そこは花火大会の真っ最中だった、銃弾が飛び交いあちこちで爆発が起こる危険な花火大会。

「状況はどうなってる？」

景明がインカムに訪ねると、NHKアナウンサーのような声が耳に届いた、通信科の中空知だ。

『状況は現在こつちが不利です。対岸に渡るための仮設橋が爆弾によつて崩落、対岸への移動が困難になっています、相手の戦力は民兵が50人ほど、AK-47やRPG-7などで武装していると思われます』

「了解、状況が更新されたらまた伝えてくれ」

そういつて景明は武偵高の生徒が撃ち合いをしている河川敷へと降りる。対岸から撃ってくるのは、就職難で就職できなかったエリート学生や、主婦、老人など、現代社会から見捨てられたような存在の

人々ばかりだ。そうなつたら最後は宗教にすぎるしかないのだろう。ガンケースからACRを取り出す、マガジンは装着済み、コッキングレバーを引いて初弾装填。

（もっとも、こういうことした時点で同情も手加減もする余地なんてないけどな）

そう思つて、工事用のクレーンを遮蔽物として使っている、強襲科の生徒のところへ行く。

「状況は？」

「連中、また兵士が増えてる、RPGが飛んでくるからまともに反撃できない!」

「わかった、今から援護する」

援護を求める強襲科アサルトの生徒と共に対岸へ向けて撃ち始める。それと同時に作戦に参加している生徒達に通信を繋いだ。

「全員聞いているな!もうすぐ車輛科の架橋戦車が到着する。強襲科と狙撃科の増援もだ、あんな民兵風情に遅れをとるな!」

インカムから作戦に参加している生徒の了解の声が聞こえる。そこへようやく武藤の運転する架橋戦車がやってきた。強襲科と狙撃科の増援をつれて。

「いけ!強襲科アサルトが道を拓く!」

大分調子が戻ってきたらしい、強襲科アサルトの生徒が射撃を再開した。

「全員、対岸のRPGチームにプレッシャーをかける!架橋戦車がやられたら全員で泳ぐことになるぞ、いいな!」

景明が発破を掛ける、対戦車兵器としてはもっともメジャーなRPGを武藤の乗っている架橋戦車に直撃したらただではすまない。相手はこつちを殺す気で襲ってきているが、こつちには武偵憲章9条があるために殺すことはできない、面倒なものだ、第一に条件がフェアではない。相手が得をするようなルールだ。

(もっとも、犯罪者の人権を重視してるフシがあるからなこんなこ

とになるんだらうな・・・迷わず殺せばいいものを・・・)

日本は犯罪者の人権を重視して、できる限り穏便な方法ですまそうとする、警察が立て籠もり犯に向けて説得を行っているのがいい例だ、だがそれで警察に被害者が出ているのでは話にならない、メディアも犯人が死亡するところぞつて警察の手際の悪さを批判する。犯罪者がみんなお涙頂戴でおちると思ったら大間違いだ。そんな人情話はTVの中だけの話。

(あー、ダメだ、仕事に集中しないと・・・)

ダークな思考の中にとられ掛けた頭を元に戻す。敵の数は大分減ってきているが依然攻撃は続いたままだ、武偵高の負傷者は後退させて衛生科メイカに診てもらっている。

『おい、まずいぞ。軽戦闘車輛テクニカルだ!』

架橋作業に入ろうとしていた武藤がそう叫んでいるのが聞こえた、軽トラックの荷台に軽機関銃をつけた簡易な戦闘車輛。

「させるか!」

橋の上にもどりつつACRを撃つて次々と行動不能にしていく。テクニカルのタイヤを撃つて行動不能にさせる。乗っていた学生らしき青年に銃弾を叩き込む。威力の弱い弱装弾なので、死ぬことはない。

「グレネードランチャー装備してる奴は対岸に向けて撃ちまくれ!」

数人がグレネードランチャー発射器をもっていたようで、アムド装備科



が作った催涙ガス弾や催眠ガス弾が次々と対岸に飛んでいく。

「影明！もうすぐ、神崎と狙撃科スナイプがそっちに到着するぞ！」

「了解！」

参加している情報科インフォルマの生徒がそう伝えてきた。イギリス武偵高からやってきたSランク武偵、神崎・H・アリア、彼女の参加は大きい、今のうちに次の段階への準備を進める。

「もうすぐここに神崎が到着する！拳銃格闘アル・カタが得意な奴は架橋と同じ時に前にももらうからな！今のうちに集まってくれ！」

テクニカルを排除と同時に武藤の架橋戦車が橋をかけ始めた、とそこへ、神崎や、狙撃科スナイプの生徒を乗せた武偵高のヘリがやってくる。

「どうなってるの!?!」

「今さつき橋が完成したところだ、来てもらってすぐで悪いんだが、突入部隊に加わって欲しい、構わないか？」

「ええ、いいわよ。でも突入はアタシだけです。文句は認めないわよ！」

神崎が単独先行するのはいつものことなので、拳銃格闘アル・カタ使いの生徒は第2便として待機させておく。

「突入部隊以外の全生徒は援護射撃で相手に頭を上げさせるな、3カウントだ、行くぞ、3！」

1を言い終わる前に全員が援護射撃を開始、神崎が対岸へと突撃を開始する。上空からは狙撃科スナイプの生徒も射撃をし始めた。銃だけを狙った精密射撃だ。

「せめて、最後までカウントしてから撃ちやがれ！！」

インカムにそうつつこんでから景明も撃ち始める。神崎の後に続いて、強襲科アサルトの生徒が対岸へと渡る。景明達の援護射撃が効いているのか、相手は頭を上げてこない、狙撃科スナイプによって銃を破壊され、対岸にわたった強襲科アサルトの生徒達の活躍もあり犯罪者達は順調に捕まりつつあった。

「ま、こんなところか」

こうして、この大規模な銃撃戦は、幕を閉じた。

東京都お台場近郊港湾地区 16:58

周囲が、オレンジと青の空へと色を変えている、この時間は夕方と夜の境目のような時間帯だ。武偵高と過激派宗教グループとの銃撃戦が終了してから現場では鑑識科レリアの現場検証が行われていた。第2派を警戒してか、強襲科アサルトの生徒が護衛している、景明も護衛に加わっていた。

「武藤、架橋戦車はどうだった？」

「中々楽しかったぜ、戦争映画みたいで、えつとな・・・」

笑顔で架橋戦車について語る武藤の話を一通り聞いているとスマ

「スマートフォンがなった、電話してきたのは強襲科アサルトが誇るイケメン、不知火亮だった。」

「不知火か、何か判ったか？」

「さっきの犯人達を尋問科ダギョウが尋問してるけど、みんな当時の記憶を無くしてるんだって」

「・・・判った、また何かあつたら連絡してくれ」

そう言つてスマートフォンをコートのポケットに仕舞う。

「なんかあつたのか？」

「不知火からで、さっきの連中、軒並み記憶喪失だとき、面倒なこつた」

「お前んとも大変だな・・・同情するぜ」

武藤の架橋戦車を専用の運搬トレーラーに載せると、武藤が帰つて行つた。鑑識科レレテの現場検証も大分終わつたらしい。撤収準備が進んでいる。

「さて、俺も帰るとするか・・・ん？」

再びスマートフォンが鳴つた。差出人は不明、だが、メールには依頼と時間と場所の指定がされていた。その依頼とは・・・自分のパートナーとなつて、ある依頼を一緒にしてもらいたいということだった。場所は、晴海埠頭公園に夜の9時。

「・・・今日は、長い一日になりそうだ・・・」

そう呟くとACRの入ったケースを提げて、景明は歩き始めた。

## 第2話 いつもの戦場（後書き）

次回、ヒロイン登場！感想お持ちしております！それでは！！

第3話 ある月の綺麗な夜のこと(前書き)

メインヒロイン登場!

### 第3話 ある月の綺麗な夜のこと

東京都 台場区 晴海埠頭公園 19:24

目的地である晴海埠頭公園についたときにはすでに夜の帳が下りていた。街灯がぼんやりと公園を照らしている。

「はじめまして、こうして話すのは初めてだね」

不意に、後ろから少女が現れた。武偵高の防弾制服に、スパッツ、編み上げブーツ、白い防弾ロングコートを羽織った少女で、栗色の髪をツインテールにして赤いフレームの眼鏡をかけている。

「名前は？見たところ同級生ってのはわかるんだが・・・」

「そうだね、私は服部つかさ、矢崎君と同じ2年A組だよ」

そういつて微笑むつかさ。

「依頼の内容は歩きながら話すね。行こ」

そういつて2人は歩き出す。

「今日の依頼はね・・・」

彼女の口から依頼内容が語られた。内容はこうだ、1年前、神奈川県浦賀沖で、豪華客船『アンベリール号』が沈んだ。乗客に被害者はいなかったものの、乗り合わせていた武偵1人が行方不明となった事件だ。そして乗客からの訴訟を恐れたクルージング会社とそ

れにあおられた一部の乗客が、乗り合わせていた武偵の無能を糾弾し始めた。そしてそれに便乗する形でマスコミも報道を開始、連日、乗り合わせていた武偵の遺族を叩いたという事件だ。現在となつては覚えていた者も少なく、この事件を知っているのは一部の武偵とその遺族のみだという。

だがこれは表の話、実はこの話には知られざる一面があつた。

この激しい報道合戦が一段落した直後から、訴訟を起こした乗客や過激な報道をしていた週刊誌や新聞の記者、ニュースで武偵に対して否定的な意見を言ったニュースキャスターや識者達が次々と死体となつて発見された。場合によっては一家丸ごと死体となつて発見されたケースも存在するという。一見関連性がなかったため、メディアも大して報道しなかつたため大事にはなつていない。そしてその件を調べていた記者も、数日後、喉仏にナイフが突き刺さつた凄惨な死体で発見された。

「で、今夜は最後の仕上げ、当時クルージング会社を経営してた社長の家を襲つんだ。でも、数日前から社長の家に何人かPMC《民間軍事会社》の連中がいて私じゃ手に負えないって思ったの。だから矢崎くんを呼んだんだよ」

「なるほど、殺し《スーパー》か」

「どうする？ やらないっていうなら無理強いはしないけど・・・」

「いや、武偵は金をもらつて何でもやる何でも屋・・・傭兵と大して変わらないからな・・・いいぜ、武偵の本当の怖さつてのを教えてやる」



そういつて凶悪な笑顔を浮かべる影明。

「いいよ、矢崎君……なんか滾ってきちゃう……食べちゃいたいなあ……」

影明に聞かれないように言っつて、腰のホルスターから銃を取り出すつかさ、彼女が今回使うのは、SIGザウエルP226、高性能なことで有名なスイス製のハンドガンだ。

「周囲のPMCは俺が始末する。殺していいんだな？」

「うん、好きなようにやっちゃって!」

そう言っつて、目的地である、クルージング会社の社長が住む家にとどり着いた。

「敵の戦力はどのくらいだ？」

「事前の報告では7人だっつて」

「判つた、先にPMCから片づけていくから、バックアップは任せたぞ」

「りょくかい」

そう言っつと、ACRを構えて屋敷の中へと潜入する景明、数人のPMCの社員が警備している最中だつた、ACRのセレクターレバーをセミオート（単発）に変更して、相手の頭に銃弾を撃ち込む、倒れたときの音を聞かれるとマズイので、体を抱きかかえて、静か

に倒す。つかさにハンドシグナルを送る。

『見張りは始末した』

『判った、鍵を開けるから、そつちで待ってて』

暫くすると、つかさがやってきた。玄関に回ってピッキングでもするのかと思いきや・・・いきなりフレーム爆薬をセット、ドアを盛大に吹き飛ばした。

「大丈夫なのか？」

「ジャミング電波妨害は一応してあるし、この家は結構離れてるから大丈夫だと思っただけだな・・・？」

「・・・ま、いいか。今ので起きただろうな、ここからは予定通りだ、俺はここにいるPMCの連中を始末してから合流する、行け！」

「頑張つてね！応援しちゃうよ！！」

そう言つて、先に家の中へ、突入していくつかさ。別の部屋から完全武装の男達4人が血相を変えて出てきたが・・・。

「そこはもつと冷静に行動しろよ・・・にわか傭兵どもが」

戦場で一番大切なのは、銃の腕でも、特技でもない、いかに冷静に行動するかが大切だ、その点でこの傭兵達はダメだった。突然の襲撃に対して状況確認もせずに出てきたからだ、冷静にACRで始末している最中に、別の方向からナイフが飛んできた。咄嗟にACRでガードする、ナイフは・・・ACRの機関部に深々と突き刺さ

った、もうこの銃は使えない。M92FSを取り出す。

「はあああっ！」

気配も消さずに後ろからナイフを持った男が飛びかかってくる。さつき、ACRにナイフを命中させたのもこいつらしいが・・・

「せめて気配を消してから襲いかかれ」

冷静に相手の顔面に裏拳を叩き込む。感触からすると鼻の骨をへし折ったらしい。

「うっ・・・・・・」

顔を押しえて、うめく男に近づく、手足に1発ずつ叩き込んで動けなくしておく。武偵はあまり犯人を痛めつけるようなことはしないのだが、今は別に気にしない。

「ここにいる連中はあんたで全部か？」

「そ、そうだっ！せ、せめて命だけは助けてくれよっ！..!」

「悪いが俺は妥協しない主義でな。命乞いは聞かない。じゃあな」

銃声と共に男が血の海に倒れた。つかさは2階に行ったらしい、上で暴れる音がしている、2階に上がってつかさと合流する。

「あ、矢崎くん！終わったの？」

「ああ、きれいさっぱりだ。みんな寝てるよ・・・こいつらか」

2人の視線の先には寝間着姿の男女がいた。共に50歳くらいだろう。銃を見て恐ろしく震えている。

「こ、こんなことをして・・・ただでむと思っっているのか・・・！」

「そ、そうよ！けけ警察に連絡してやるんだから！」

2人は何故自分たちが殺されるハメになったのか判っていないらしい。

「ねえ、2人とも、あんたらは、私たち武偵の恨みを買ったの、覚えてるよね〜1年前の事故のこと〜」

「あ、あれは会社を守るために仕方なかったんだ！武装を許されているからって調子に乗りやがって・・・社会のクズどもめ！！」

「そうよ！銃なんて野蛮きわまりないわ！そんなのだから犯罪は減らないのよ！犯罪を減らすには、まずお互い対話の場所を持って・・・」

銃声、妻の眉間に坑が開いていた。

「聞きたくもねえもんをベラベラ喋りやがって、てめえはTV伝道師か」

景明が吐き捨てるように言う。

「なんてことをするんだ！私の妻が・・・ああ・・・！！」

そう言っつて社長が隠していた銀色のリボルバーを取り出して撃つたが・・・その前に景明とつかさ2人の銃から放たれた弾丸が社長を撃ち抜いた。盛大に血をふきながら地面に倒れる社長。だが最後にはなつた弾丸が景明の顔をかすつた。

「矢崎君！大丈夫なの！！？」

がくがくと音を立てながら景明を揺らすつかさ。

「ん・・・大丈夫だから、そんなに揺らすな・・・」

そう言っつて景明が立ち上がる。

「ふう・・・よかつたあ・・・」

「で、どうするんだ、こいつら」

そう言っつて景明が2人の死体を指さす。

「あ、それはもう大丈夫だよ」

つかさがコートのポケットから何かのスイッチを取り出す。

「はい！外で押してね！！」

「はい、といわれてもな・・・」

そう言いつつも家の外に出る2人。出るときに自分たちが来たという痕跡を消すのも忘れない。

「そもそも、この依頼のクライアントは誰だ？」

「なんか、公安の上の方からだって」

「公安ね・・・調べない方がいいか。こっちが消されそうだ。で、これは何のスイッチなんだ？」

この国の公安が本気を出したら人間の1人や2人、簡単に存在を無かったこと』にするだろう。触らぬ神に祟りなし、だ。

「押してみたら判るよ！」

そう言われて、景明がスイッチを押すと・・・・・・2人がついさっきまでいた屋敷が盛大に炎を上げて吹き飛んだ。

「・・・ちよつと多すぎないか」

「これくらいでちょうどいいんじゃない？」

2人が罪の意識など欠片もないような会話をしていると遠くからパトカーや救急車のサイレンの音が聞こえてきた。路線バスに乗って、学園島へと帰って行く。

学園島 第3男子寮 20:47

あの後検問にも引つかからず、無事に2人は帰ってくる事ができた。直線の道路に沿って規則的に街灯が立っている中を2人が歩いていく、月光が2人の影を道路に映し出していた。

「今日は・・・ありがとね。助かったよ」

「そうか、助けになったのなら何よりだ」

さつきからつかさはずっとこうだった、屋敷から帰る途中、話を仕様にも互いに話が続かないのだ。戦闘中のハイテンションとは打って変わっておとなしくなっている。

「それじゃ、俺の男子寮はもうすぐなんぞな。ここらへんで・・・  
つと、どうした？」

いきなり、つかさがコート裾をつかんできた。

「えつと・・・その・・・矢崎くん、私の・・・パートナーになってくれない・・・かな？」

上目遣いをお願いするつかさ。その眼には期待と不安の色が見える。

「わかった、それじゃ、これからよろしくな。」

「うん！ありがと！矢崎くん！！」

パートナーになってくれたのが相当嬉しいらしい。

「それと・・・俺のことは、景明でいい」

「じゃ、私は『つかさ』でいいよ。これからよろしくね！景明  
！！！」

どつやらあれが普通の彼女らしい、女子寮へむけて駆けだしていくつかさを見送ってから、景明も寮へと戻っていく。こうして、この月の綺麗な夜に新たな2人組が武偵高に生まれた。



第3話 ある月の綺麗な夜のこと（後書き）

感想お待ちしております。それでは!!

## 第4話 武偵高の日常（前書き）

### 登場人物紹介2

服部つかさ 性別：女 身長：164 スリーサイズ：不明

影明のパートナーとなった少女で、栗色のツインテールと赤いフレームの眼鏡がトレードマーク、場合によっては白い防弾ロングコートを着ていることもある、所属クラスは2年A組。

その名から判るように徳川家康に仕えた伊賀同心の支配役、服部半蔵の末裔だが、分家筋と言うこともあり、実家からそれほど縛られていない、忍者としてのスキルは1年の諜報科レザドの風魔ひなほど高くない。その反面他の戦闘能力は一族の中では最強といわれているのだが、なぜか影明の前ではあまり見せないようにしている。猫のような性格だが、影明の前では素が出るらしい。（キャラのイメージとしてはエヴァ破のマリ）これといった使用武器はなく基本的に何でも使う。武偵ランクはA。

## 第4話 武偵高の日常

第3男子寮 景明の部屋 6:36

基本的に武偵高の寮は複数の生徒で共同生活を送るため、広い間取りなのだが景明は1人でこの部屋を使用している。が、今日は珍しいことにこの部屋に来客があった。

「……で、なにしてるんだ」

「朝ご飯たかりに来たの」

部屋のTVで朝のニュースを見ながらそんなことを平然と言つてのけるつかさ。

「いつも朝はどうしてるんだ？」

「ウイダーですませてる」

「……仕方ねえ、食べるか？」

そういつて、景明が持つてきたのはハンバーガーだった。

「これって、手作り？」

「ああ」

ハンバーガーを食べたつかさの動きが止まった。

「・・・口に合わなかったかな？」

「なんで・・・」

「？」

「なんでこんなに上手なんだろう・・・シヨック・・・でもおいしいね、これ、これから毎日たかりに来てもいい？」

「好きにしる」

そうやって、TVのチャンネルをまわしていく、TVでやっているのはいつもと変わらない、政治家の汚職や、アイドルのゴシップ、今日は有名なイケメン俳優がアイドルとつきあっていることが発覚したというニュースが大々的に取り上げられていた。

「こんなニュース見て、誰が喜ぶんだろ？」

「さあな、どこかの暇な人間だろ」

そうやって再びチャンネルをまわす、国際的なニュースはやらなくせに、ゴミのような政治家や三流アイドルのスキャンダルはバカみたいに繰り返し放送している。

「国際的な問題に日本人は驚くほど興味が少ない、日本は平和だし、戦争もしていないから、遠い遠い海の彼方って感覚なんだろう、だから、アフリカの方のドキュメンタリーを見て『かわいそう』とか言って募金をするバカがこの国には多いんだろうな、何も知らないからこんなことが言えるんだ、無知ってのは恐ろしいモンだね」

「・・・実際にこの目で見てきたような言い方だね、行ったことあるの?」

「ああ、昔行ったことがある、俺の経歴も一通り調べてあるんだろ?」

「うん、表も、裏も知ってるよ」

「20XX年のアフリカ東部にある軍事独裁政権の幹部を誘拐したときにな、見たんだよ。世界各国から送られてきている募金はそのほとんどが政府の要人の道楽に使われたり兵器購入の資金になってるって書類をな・・・うつすら予想してたとはいえ実際に見てみると相当なもんだったな」

「そのクールな性格はその時からなの?世の中を斜めに見てるって奴?」

「・・・かもな、否定はできない・・・っと暗い話題になったな・・・ってつかさ、何してるんだ?」

いつの間にかつかさは部屋の中においてあった銃を手にとって眺めている。

「LMGにショットガンにアサルトライフル・・・あ、スナイパーライフルまである、ちよつとした武器庫みたい・・・」

そう言っ物珍しげに眺めるつかさ。

「そついや、つかさは自分の銃持ってるのか?」

「うづん、中々いいのが見つからなくてね〜困ってるの」

「それじゃあ・・・この部屋にある奴で気に入った奴持って行くか？」

「・・・いいの？」

キラキラと目を輝かせるつかさ。

「銃くらいはもつといた方がいいだろ」

そう景明が言うにつかさはショッピングモールで服を選んでいくかのように銃を選び始めた、数分後、彼女が持ってきたのはHK416。HK416は、H & amp; K社が開発したM4カービンの近代改良化版で、口径は5.56mm。オプションパーツはC-MORE社製ドットサイト、サイレンサー、フラッシュライト、レーザーサイト、と標準的なパーツを装備してある。

「影明の銃は？」

「ん？この前新調してな、今は平賀のところまでカスタム中、今日あたりできるらしい」

「じゃ、そろそろ行こっか！」

自分の鞆を持って玄関へと駆けだしていくつかさ、景明もそれを追って外に出る。

「あれ、影明ってバイクで通学してるんだ」

「どっする？乗ってくか？」

そう言ってヘルメットを投げてよこす景明。

「私の分？」

「予備だ」

「ふうん」

そう言って、影明のV・MAXのシートにまたがるつかさ、バイクが轟音と共に走り始める。

武偵高 2年A組 11:56

午前中の授業が終わった、クラスでは仲のいい物同士で机を寄せ合って弁当を食べている生徒が多い。こら辺は一般の高校に見えなくもない。

「お昼はー？」

つかさが影明の席にやってきた。

「うそ・・・あの服部さんが・・・」

「矢崎くんも大変だね・・・」

「今度は何日持つか賭けてみる？」

クラスのあちこちから小声でささやかれている。それを聞いていたつかさの顔が少し曇った。

「行くぞ、ちよつとダチ誘ってからな・・・キンジー、武藤ーメシ食いに行こうぜー」

「おう！影明、まってるよ！」

「わかった、すぐ行く！」

友人2人を昼飯に誘うと・・・もう1人ついてきた、ピンク色のツインテールこの学校では有名人だ。神崎・H・アリア。5人で食堂へと歩いていく。

「おいキンジ、一体どういうことだ？Sランク武偵がお前と一緒にいるなんて、また何かやらかしたのか？」

「違う、こいつが勝手に付いてきてるだけだ、あらぬ誤解をするな。景明だって、女子連れてるじゃねえか」

「・・・まあいいや、それと武藤、自分だけツレが居ないからって泣くな」

後ろで若干泣きかけていた武藤に釘を刺しておく。適当な席に座って、各自バラバラの昼食を取る、景明はラーメン、キンジはきつねうどん、武藤はパスタ、つかさはピザ、アリアはももまんという何ともバラエティ豊かなテーブルになった。

「まあいいや、神崎さんはなんでキンジと一緒にいるんだ？」



「それよりまずお前だる景明」

「私は、服部つかさ、みんなと同じA組だよ？」

「というわけだ、次、キンジ」

「……始業式に行く途中でチャリに爆弾が仕掛けられててな……」

「で、アタシがたすけてやったのにこのドレイ、感謝もしてないの」

「よく言うぜ、勝手に俺の部屋にやってきたくせに」

言い争いを始めようとしたところにつかさ爆弾を投げ込んだ。

「え？まさかおふたりさん、できちゃってるの!？」

「「違う!?!?!」」

「づづいうところは息が合うらしい。」

昼食を済ませて、キンジ達と別れた2人は装備科アムトにやってきた。

「平賀ーいるかー？」

「はいなのだ!」

コードやら何かのパーツを髪にひつつけながら出てきたのは平賀

源内の子孫、平賀文で、料金は高いが、武器のカスタムをしてくれる。景明自身も何度か頼んだことがある。

「はいよ、料金だ」

そう言っつて、万札10枚を文に渡す景明。

「これからもよろしく！なのだ。」

そういつて文が大小2つのケースを景明に渡す。

「いくぞ、また用があつたら来る」

「毎度あり〜なのだ！」

2人が強襲科<sup>アサルト</sup>のシューティングレンジに入る。そこでようやく影明はケースを開けた。

「さすがだな、ちゃんとカスタマイズされてる」

「これは・・・M4？」

「こいつはノベスキーN4CQB、M4系ライフルのアクセサリー・カスタムパーツ開発で知られる、ノベスキー社が製作・販売しているAR15系のクローン銃だ。自社製のパーツと、人気の高い他社製パーツとを組み合わせたカスタムモデルだな」

N4には、レーザーサイト、フラッシュライト、フォアグリップの他にホログラフィックサイトを装備していた。小さな方のケースにはキンバーゴールドコンバット？、アメリカの銃器メーカーキン

バー社製のオーダーメイドしたハンドガンで、サイト以外の主用パーツがシルバーのカスタムパーツに追加変更されている。それがケースの中に2つ入っていた。

「これが、景明の本来の装備？」

「ああ、とりあえず、授業に行くか」

5時間目は強襲科<sup>アサルト</sup>の授業なので体育館へと向かう。既に数人の生徒が訓練中だった。暫くすると授業開始のチャイムが鳴る。基本的に強襲科<sup>アサルト</sup>の授業は一定のノルマをこなせば自由とされているが・・・今日は違った。

「よし、じゃあ、アリアと矢崎。2人で拳銃格闘戦<sup>アル・カタ</sup>の実習な」

蘭豹がとんでもないことを言い出した。授業に参加している生徒が一度訓練を中断して観戦にまわる。

「それじゃ、いくわよ」

アリアが黒と銀色のガバメントを抜いた、景明もコートを翻してゴールドコンバット？を両手に持つ、偶然だが2人とも使っているのはガバメント系列の銃だった。体育館が静まる。

「では、始め!!!」

蘭豹の声が体育館に響いた。

戦・闘・開・始



#### 第4話 武偵高の日常（後書き）

今回から景明の使うハンドガン、キンバーゴールドコンバット？は、有名な映画『エクスペンダブルズ』で主人公のシルベスター・スタローンが使っている銃です。気になった方は画像を探してみてくださいをおすすめします。

感想をお待ちしております。それでは！！

## 第4・5話 調査

「アリアと影明が近接拳銃格闘を模擬戦する2日前 第1女子寮  
20:56

女子寮の裏手で、アリアは1人の人物を待っていた、作業は、戦<sup>ア</sup>姉妹<sup>ミカ</sup>である、間宮あかりに任せている。暫くすると諜報科<sup>シザト</sup>の1年風魔ひながやってきた。彼女には先日自分の戦姉妹<sup>アミカ</sup>となった、あかりについて調べるように依頼しておいたのだ。一通りあかりについての報告を聞き終わる。

「間宮あかりについてはこちらでも気になることがありますので」

「そう……それと、あの2人については何か判った？」

「服部殿と矢崎殿のことでござるな？」

キンジを見つける前に彼女のパートナーとしての候補は何人かあがっていた、その中で最後まで残っていたのがこの2人なのだ。

「服部殿についてはそれほど手間は掛からなかったでござるよ」

「伊賀忍者のまとめ役、服部半蔵の子孫よね？」

「そうでござるが、彼女は分家筋の方なので、本家との繋がりも薄い  
いでござるよ」

「わかってる、アタシが聞きたいのは別のこと」

「服部殿は、忍者としてのスキルはさほど高くはないのでござるが……それ以外の戦闘技術については一族最強とも言われるほどの強さでござる。ただ……服部殿はどこか自分の力をあまり見せたがっていないようなのでござるよ」

そういつて、ひながアリアにつかさのデータをまとめた書類を渡す。

「なんでかしら……まあいいわ、矢崎の方はどうなの？」

「矢崎殿については……正直骨が折れたでござる……」

「そんな風には見えないんだけどね……どうだったの？」

「経歴がちゃんと追えたのは14歳まで、父親の死後、その友人にSASで鍛えてもらっていたようなのでござる、このときに数度の実戦にも参加が確認されているでござるが……」

「どうしたのよ、あんたらしくもない」

「SASから先の経歴が追えないのでござるよ。イギリス軍、アメリカ軍からも追ってみたのでござるが、軍事機密の壁は高いでござる」

「アイツ軍人だったのね……どうりで雰囲気か他のと違うと思っただわ……」

「それで、別の方向からせめてみたでござる」

そういつて、制服から数枚の写真を取り出すひな。

「神崎殿は、今年の3月に起きた北海の採油プラント制圧事件は存じでござるか？」

「ええ、知ってるわ。ロンドン武偵局の戦果ってことになってるけど、あの事件、本当は誰が解決したの？」

「その答えがこれとござる、プラント内部の監視カメラの映像をネット信科で解析してもらったところ・・・」

ひなが写真に映っている人物を指さす。

「これは・・・日本人よね」

「顔のパーツをスキャンして調べるシステムでこの人物を調べてみると、これは100%矢崎殿でござった」

「なんで、こいつがこんなところにいるのよ」

「それはこれを見てくだされ」

別の写真を、アリアへと渡す。それはBDUに縫いつけられた部隊章の拡大写真だった。

「オリーブの葉っぱに剣と翼、骸骨・・・ってこれまさか！」

「神崎殿の推測通り、その部隊章はタスクフォース141のもので「ジャネル」

アリアですら驚きの声を上げるようなとんでもない物が出てきた。



有名人の子孫なら自分やキンジなどもそうなので、大して驚きはしないのだが・・・眉唾ものだと思っていた特殊部隊が実在し、その中の1人が自分の近くにいるというのは想定外だった。

「まさか本当に実在したとはね・・・なるほど、ここにT F 1 4 1いるんだったらアイツの戦闘能力があんなに高いのもうなずけるわね」

「神崎殿、この2人については如何いたすでござるか？」

「この2人の調査も引き続き続けて、また報告頼むわね」

「承知」

そう言っつて、ひなが闇の中へと戻っていく。

（キンジ以外にもこんな化け物が残っていたなんてね・・・）

アリアが月を見上げつつ静かに呟いた。そのつぶやきは誰にも聞かれることなく闇の中へと消えていく・・・。

#### 第4・5話 調査（後書き）

AAで、風魔がアリアにあかりについての調査の後、主人公とメインヒロインについての経歴を調べさせていたら・・・という思いつきで生まれた話です。感想お待ちしております。それでは！！

## 第5話 模擬戦

体育館 アサルト 強襲科の授業。 14:55

蘭豹の号令と共に模擬戦が始まった。

(まずは・・・先制攻撃!!)

先に動いたのは・・・アリアの方だった。両手のガバメントを交互に打ちながらまっすぐ向かってくる。ガバメントもゴールドコンバット？も装弾数は同じ8発だ、景明がそれを避けるが数発防弾口ングコートにもらってしまう。お返しといわんばかりにアリアに向かつて撃つ。アリアがそれを避けながら景明の背後を取ったが、景明は両手だけをアリアの方に向けてゴールドコンバット？を撃つ。射線上からはずれて一度アリアが距離を取った。

(そう簡単にはやらせてもらえないわね・・・)

景明もマガジンチェンジ。今度は景明が前へ跳んだ、一気に距離を詰める。アリアがそれを右へ回避するとそれも想定済みだったらしく、右手のゴールドコンバット？がアリアに向けて撃たれる。

(Sランクの相手がここまでしんどいものとはな・・・)

1人で特殊部隊1個中隊の戦力を持つSランク武偵にはAランク武偵が束になってもかなわない。越えられない壁があるのだ、この模擬戦も開始数秒で片が付くと思われるが・・・。いつの間にか観戦していたクラスメイトは1人残らず集中して観戦していた。再び景明とアリアが互いに打ち合う、アリアの防弾制服はまだ綺麗

なままだが、景明の制服や防弾ロングコートには大分直撃している。そして・・・2人の動きが止まった。互いに相手を探っている。景明は大分疲れてが見え始めてい多、どちらにせよ次の一手で勝負が決まる。

(今よ！)

ついにアリアが動いた、景明が撃ちにくいように直線軌道ではなく、ジグザグに移動しながらガバメントを撃つ、景明がその軌道を読んで撃とうとしたときアリアが宙返りをした。

(これなら反応できないはず！)

だが、景明が瞬時に反応、アリアに向けてゴールドコンバット？を撃ちまくる、ついにアリアの防弾制服に弾丸が直撃した。再び背後を取ってガバメントを突きつけるが、景明も同じタイミングでアリアにゴールドコンバット？を突きつけていた。

「そこまでにしる！」

蘭豹がそう言うつと体育館に張りつめていた緊張が解けた。

「矢崎、Sランク相手にあんだけ持ちこたえるなんてスゲえぞ！」

「よくやった！」

体育館のあちこちで、観戦していた生徒から賞賛と歓声があがった。

「じゃ、後は自由にしろ。以上！」

蘭豹がそう言って体育館を出て行くと後はいつも通りの自主訓練が始まった。

「かくげあき！すごいね、神崎さん相手に6分も持ちこたえるなんて！」

つかさがハイテンションでやってきた。

「格の違いって奴を思い知ったぜ………疲れた」

そう言いながらスポーツドリンクを飲む影明。

「で、どうする？」

「私はこれからHK416を慣らしに行くよ、景明は？」

「俺も、N4の慣らしでもするか」

そう言って、影明が自分のケースを持って第1グラウンドにある射撃場へと向かった。既に数人の強襲科アサルトや、狙撃科スナイプの生徒が訓練していた。

「わたし。HK416取ってくるね」

つかさが銃を取りに行くと、影明はN4 CQBをケースから取り出した。

「やあ、矢崎くん」

「不知火か、どうした？」

話しかけてきたのは友人の1人である不知火亮、強襲科アサルト所属で、ランクはA。影明も何度か一緒に組んで任務をこなしたこともある。クエスト

「神崎さん相手に5分以上持ちこたえたAランクなんて、矢崎くんが初めてじゃないかな？」

「引き分けに持ち込めただけで僥倖だぜ・・・」

「そんなに謙遜することないって、それと最近服部さんと組んでるんだって？」

「人の口に戸は立てられぬ・・・か、面倒だな・・・」

N4にマガジンを差し込んで初弾装填、ターゲットに向けて撃つ。ターゲットの真ん中に命中。

「クラスの女子が話してたらしいんだけどどうしてあんなのと組んだんだろうってさ」

「下世話な好奇心って奴か・・・ちょっと遅すぎないか？」

つかさがいつまで経っても戻ってこない、既につかさを見送ってから15分が経っていた。

「・・・確かにね、何かあったのかな？」

N4をケースにしまってつかさを捜すことにした、強襲科アサルトの装備保管庫でつかさは見つかったのだが・・・

「・・・つかさ、どうしたんだ？」

「景明にもらった銃・・・こんなになっちゃった・・・」

つかさが指さすとそこにはパーツ単位でバラバラになったHK416が転がっていた。光学機器も中の配線がショートさせられている。再生できないレベルの壊し方だ。

「ごめんね、影明。せつかく影明がくれたのに・・・」

つかさの目から涙がこぼれ落ちる。不知火が静かに装備保管庫を後にした、こういう時の気配りが彼のモテる一因なのだろう。

「大丈夫だから、泣くな」

静かにつかさの手を握る影明。相手が何も言いたくないときは、黙って側にいてやることだ、とマクダヴィツシユ大尉から教えてもらったことがある。不意に人の気配がした、装備保管庫から外に出てみると、数人の女子の後ろ姿が見えた。

「・・・つかさ、場所を移動させるぞ。学校には早退したって言うておく。これが俺の部屋のキーだから、先に行って待ってる」

景明が教務科マスターズに報告しに行こうとしたときコートの裾が引っ張られた。前にも一度つかさに引っ張られたことがあったが、今回は、前よりも弱々しかった。

「・・・一緒に来て・・・」

眼鏡の奥の潤んだ目でそう言われると従わざるをえなくなってしまう。

「わかった、行くぞ」

2人がバイクに乗って武偵高を後にした。



## 第5話 模擬戦（後書き）

次回、多分ですがフラグが立つと思います。それでは、感想待っております！！

## 第6話 ジャッカス

つかさにバイクのところへ行くように指示してから、影明はもう一度装備保管庫を調べた。小型のハンドガン用ケースが開いたまま放置されている。中に入っていた銃は盗まれているようだった。

「やれやれ・・・どここのバカだ・・・？」

そうぼやかずにはいられない影明だった。おそらくはつかさの才能に嫉妬した誰かが徒党を組んで持ち物・・・武偵高ぶていこうでは銃を隠したり壊したりしたのだろう。こういうところも普通の高校生らしいといえはそうなのだが、ここは武偵高なのだ、そんな暇なことをしている暇があるのなら生存率を上げるための努力をしたほうがいい。

(後日、マスターズ教務科に報告するか・・・)

そう決めると影明は自分のガンケースを持って、つかさのところへと向かう。早退することは不知火経由で蘭豹に伝えてもらっている。いい友人を持ったものだ。

「つかさ、大丈夫か？」

涙のあとが残っているが、もう泣きやんだようだ。ヘルメットを渡してV-MAXで第3男子寮へと戻る、自分の部屋へつかさを連れて行く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

部屋に入ってから、つかさは無言だった。そうなると部屋の空気

も沈んだものになっていく。話しかけにくいから沈黙が続く、空気が沈む・・・悪循環なことこの上ない。

「・・・・・・・・ごめんね、影明。わたし・・・・・・・・皆から嫌われてるみたいなの・・・・・・・・だから・・・」

「パートナーは解消・・・・とでも言つつもりか？」

「・・・・・・・・うん。影明がしたいなら・・・・それでもいいよ・・・」

「・・・・・・・・それで、お前はどうしたい？」

「え・・・・・・・・？」

顔を上げて、影明の方を見るつかさ。

「俺のことはどうでもいいから、つかさはどうしたいんだ。解消するか、しないか、だ」

「・・・・・・・・くない・・・・解消したくない!!」

「じゃあ、そうしろ。周りの悪口なんざ聞くな、評価も気にするな、大事なのは自分自身の意志って奴だ・・・・・・・・柄にもないこと言ったな」

若干顔を背ける影明、つかさがにやけているのが判る。大分調子が戻ってきたようだ。

「あれ、影明、顔赤くなってない？」



いつものつかさに戻っている、やっぱりこの相棒は元気でない  
と困る・・・と影明は思った。

「晩飯は・・・ピザでもいいか？」

「うん、いいけど・・・作ってくれないんだ」

「今日は食材を切らしてな・・・」

暫くするとピザが届いた、2人で5つずつ分ける。

「あれ？影明、飲んでのって・・・オレンジジュース？」

「悪いか」

「なんでなの？」

「笑うなよ」

「笑わないよ」

若干にやけているのは見なかったことにする影明。

「炭酸が飲めないからだ」

「病気？アレルギー？」

つかさが心配そうに聞いてくる。

「単に苦手だからだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「それだけ？」

「それだけ」

つかさが笑っている、笑わないと言ったはずなのだが・・・・・・  
まあ、元気になったし、笑顔も戻ってきているので、影明は食事に  
戻ることにした。

第3男子寮 20:22

夕食をすましてから暫くしていると雨雲が出てきたのでつかさが  
女子寮へ帰ることになった。折りたたみ傘を渡して気をつけるよう  
に言っておく。

「それと、ハンドガンもやられてたんだが・・・・この際新しい銃を  
渡しておく、2丁拳銃は出来るか？」

「うん」

「じゃあ、これを」

そう言って影明が渡したのは、スイスの銃器メーカーSIG社が  
製造したガバメントとSIGザウエルP226を足して2で割った  
ようなデザインのハンドガン、SIG GSR。スライドはシルバ  
ーになっている。

「これ・・・いいの？」

「ああ、大事に使ってくれ、HK416の方はまた近いうちに渡す、じゃあな」

「・・・影明、今日はありがとう！」

満面の笑顔でつかさが言うと影明は照れくさそうに笑った。つかさが女子寮へ向けて駆けだしていく。

「さて・・・横田まで行って帰ってこれるかな・・・」

つかさside

初めて、彼を見たのは武偵高に入ってからだった。どこか他人を寄せ付けないような雰囲気のものだったが、私はそんな彼をいつの間にか眼で追うようになっていた、暫

くすると、頭のどこかでいつも彼の

ことを考えるようになっていた。何かのイベントの時、こういうとき、彼なら・・・と考えてしまう。

そして、今年、裏の仕事が回ってきた、本来なら1人でも出来るはずの仕事だったのだが・・・いつま

でも見ているだけでは始まらない、だから・・・彼と共同で仕事をこなした。学校での嫌がらせの回数

はだんだん増えていったが・・・あえて気にしないようにしていた。そして、今日、いよいよ装備にまで手を掛ける彼女たちに心が折

られかけたが・・・それよりも彼に心配してもらえたことの方が嬉しかった。これからもパー

トナーを続けていけることが嬉しかった。

「やっぱり・・・これは恋・・・かな？ とうなっちゃったのは君のせいなんだからね、影明」

私は写真立ての彼にそう言った、本人と明日も話せるのに、私は恋に関して奥手なのだ・・・と自覚しつつ、私は夢の世界へと旅立った。

side out

武偵高 7:59

今日は朝から雨だったので、朝練は中止。今はこうして教室で銃の整備をしている最中だ。つかさは・・・無事学校に來れている。嫌がらせグループの女子達が一カ所に集まって作戦会議しているのが目についた。そのうちの1人がこっちにやってくる。

「ねえ、矢崎くん。服部さんに何があったの？」

リーダー格の女子が何食わぬ顔でそう尋ねてくる。だが・・・

「へえ、装備の次はパートナーに手を出すんだあ？」

つかさの逆襲が始まった。

「何のことかしら、私たち友達でしょ？」

「よくそんなナメたこと抜かせるね、って影明？ 鳴ってるよ？」

コートの外ポケットに入れていたスマートフォンに着信があった。



相手は・・・非通知。

「はい、もしもし」

『初めましてね、矢崎影明』

聞き覚えのある声、この声の主は・・・

「神崎か、何の用だ」

『手伝ってもらいたいことがあるの、事情は追って説明するわ。とりあえず・・・あなたの相棒はそこにいる?』

「ああ」

『じゃあ、車輛科<sup>ロツ</sup>の車輛整備所まで行って、場所は判るわよね?』

「・・・何が起きた」

『バスジャックよ、あなた達の力を借りたいの』

「了解だ、すぐに向かう」

スマートフォンをポケットに入れて席を立つ、緊急事態発生だ。

「つかさ、行くぞ。仕事だ」

「りょうかい」

つかさも戦闘モードへチェンジする。

いつのまにか雨脚が一段と強くなっていた。

## 第6話 ジャッカス（後書き）

さて次回は原作のバスジャック編へ！感想お待ちしております！

## 第7話 バスジャック

雨が降りしきる中、影明とつかさは車輜科ロツの車輜整備場へたどり着いた。ここには生徒が使う車輜や武偵高のヘリが格納されている。今もコンクリートで覆われた野外整備場にヘリが待機しているその周囲にはレインコートを着た車輜科ロツの生徒がチェックしているのが見えた。

「矢崎と服部はこっちのヘリだ！」

同じくレインコート姿の蘭豹が2人を手招きする。通常の輸送ヘリの隣にはそれより一回り小さな卵形のヘリが待機していた。

「MH-6ですか」

「そうだ、アメリカ陸軍からレンタルしてる」

MH-6 リトルバードとは、MDヘリコプターズが生産している軽多目的用及び攻撃強襲用ヘリコプターで観測ヘリOH-6の軍用派生版だ。今回はM134ミニガンを2門装備している。

「ヘリの運転できるの？」

「一応習った。実際に飛ばすのはずいぶん久しぶりだ」

2人とも武偵高の制服でヘリに乗り込む、本来ならC装備で乗り込むべきなのだが、時間がそれを許さない。ヘッドホンを耳に当ててエンジン始動、メインローターが回り始める。隣のヘリが先に飛び立った。別の着陸地点にいる神崎達を迎えに行くらしい。

「俺達はバスの追跡と接近する脅威の排除か、了解。ホーネット2  
-1 テイクオフ!」

雨の降る中をリトルバードが飛び立った。事前にバスの特徴を聞いていたのでバス自体はすぐに見つかった。

「あれ・・・みたいだね。他の車はいないみたいだけど・・・」

「おそらく警視庁と東京武偵局が封鎖を始めたんだろう、多分、レインボーブリッジへ繋がる高速道路は全面封鎖だろうな」

「珍しく対応が早かったね」

「世論がこれ以上反武偵になられちゃ困るからな。悪性腫瘍に触るネタはこれ以上増やしたくないんだろう」

「世知辛いね」

こういつときでもつかさが明るいと緊張せずにすむ。

「それはそうと、つかさ、お前今回へりの銃手頼むわ<sup>ガンナー</sup>」

「え・・・? まじで?!」

「俺はこのとおり操縦で忙しいからな。代わりにやってくれ。なに、そのスティックについてるボタンをターゲットに向けて押せばいいだけの話だって、照準は自動的にやってくれるから楽なもんだって」

「う・・・わかった、やってみる」

つかさの顔が若干引き締まったものになる。バスを追うように飛行しているのと先刻発進したヘリがやってきた。

『ジエスター111からホーネット2-1へ、矢崎、服部、聞こえてる？』

「こちらホーネット2-1、聞こえてるぜ。状況はあらかた聞いている。今のところ接近する脅威は確認できない」

『私たちが直接バスに張り付いて爆弾を解除するわ。あんた達はバツクアツプよ』

「ホーネット2-1了解」

無線交信を追えた直後、バスが進路をレインボーブリッジへ向けた。

「連中、あんなのを都内に入れるつもりかよ……？」

「まともじゃないね……」

バスが、学園島から離れて、レインボーブリッジを渡り始める。

アリア達の乗ったヘリがリトルバードを追い越した。

『あたし達はバスに張り付くわ』

そう言って、アリアともう1人の男子生徒がバスの上に立つ。ヘリのキャビンからはドラグノフの銃身がのぞいていた。あんな古い銃を使うのはこの学校ではあんまりいない。おそらく狙撃科のSラスナイプ

ンク武偵、レキを連れてきたのだろう。

「あれは・・・レキだね」

「神崎もいい駒そろえてるな」

そんなことを言っていると・・・

「影明、ちよつとあれ見て」

つかさが指さした方向から5台の車が走っていた。封鎖中なのに走っているところを見ると、事前に配置してあった車らしい。しかも5台とも乗り手がいなかった。

「無人車だな・・・あれは・・・げえ、RPGだ・・・」

無人車には銃が装備されていた。3台がSMGの中ではもっともポピュラーなウージー、残りの2台は対戦車ロケットとしてはもっとも有名なRPGを装備している。

「ホーネット2-1からジエスター1-1へ、そっちに向かう車を5台を確認した。どうする？」

『ジエスター1-1からホーネット2-1へ、排除してくれ』

「了解、すぐに始末する。つかさ、出来るな？」

へりを大きく傾けて、無人車へと接近する。段々距離が狭まってきた。

「つかさ、今だ！撃ちまくれ！！」

「わかった！！」

つかさが操縦桿にあるボタンを押した、リトルバードの両側に装備されているミニガンが火を噴いた。最後尾の車輜が鉄屑となる。

「次だ！」

再びミニガンが吼えた、今度は燃料タンクに引火したのか盛大に炎を上げて爆発する、これでRPGを装備している車は破壊できた。あとはウージーを装備している車輜だ。3台のうち2台がバツクしながらウージーの砲口をリトルバードへ向ける。

「つかさ！ひるむな！撃ちまくれ！！」

「任せて！！」

再びミニガンが火を噴いた。平等に無人車へ命中。盛大に炎を吹き上げる。

「残りはどこ行った！？」

「バスのところ！今撃ったらバスに当たっちゃう！！」

ミニガンが使用する7.62ミリ弾はバスの車体を簡単に貫通する、しかもあの中には武偵高の生徒がわんさか乗っているの、流れ弾が直撃すれば大変な事態となってしまう。

「影明！リトルバードをぎりぎりまで近づけて！！」



「何か思いついたんだな!？」

「うん、それとN4も!！」

「了解だ、乗ってやるぜ!！」

そう言うのと影明がリトルバードをぎりぎりまでバスの先頭に寄せ  
る。つかさはガンケースからN4を取り出して、身を少しだけ乗り  
出して片手でN4の狙いをつけた。

「5秒だけ姿勢を安定させて!！」

「任せろ!！」

だが、その前に無人車のウージーがアリアを撃った。それを参加  
していた生徒・・・キンジが受け止める。

「今だ!！」

影明がリトルバードの姿勢を安定させた。それと同時につかさが  
片手でN4を撃った。銃弾は見事にウージーを黙らせる。それと同  
時にレキがタイヤを撃つて最後の1台を止め、爆弾も吹き飛ばした。  
東京湾に落下した爆弾が盛大に水柱をあげる中、ようやくバスが止  
まった。

「一段落つてところか・・・降りるぞ」

リトルバードを着陸させる。バスから降りてきた生徒達が互いの  
無事を喜んでいるのが見えた。

「よう、大活躍だったな」

「武藤か、災難だったな」

「全くとんだ日だぜ……ってそれ……リトルバードか!？」

「アメリカ軍からのレンタル品だ、壊すなよ」

武藤にそう釘を刺してからキンジ達の方に行くが……目の前を救急車が走り去っていった。おそらくキンジはあの救急車に乗っていったのだろう。ヘリに戻ろうとして振り向くと目の前につきさがいた。

「今日は見事だったな、初めてで4台破壊はすごかったぞ。それと最後の片手撃ちもだ」

最後に見せたアサルトライフルの片手撃ち、あれは誰でも出来る技ではない、片手で撃つには反動が大きいうえに、狙いがぶれてしまふのだが、つかさは見事にそれをコントロールしきった。

「えへへ……ありがとう」

影明に褒めてもらったのが嬉しいのか、若干照れたようになるつかさ。いつの間にかあれほど激しかった雨は大分収まっていた。

第7話 バスジャック(後書き)

感想待ってます!!

## 第8話 武偵殺し

バスジャックが解決してから数時間後、影明とつかさは未だにリトルバードに乗っていた。作戦が終わって、リトルバードを車輛科ロソウに返しに行ったところで、蘭豹に捕まり、バスジャック犯が潜伏していたと思われるホテルを突き止めたので、鑑識科シレイと探偵科イソケスタのメンバーの輸送兼護衛として再び飛び立つこととなったのだ。

アサルト強襲科の生徒は基本的に戦闘がメインなのでそのほかの技術・・・通信や運転が出来ない者が多い、Sランクの生徒なら、単独でもある程度こなせるのだが、アリアやレキのように扱いづらい生徒が多い。そのために影明とつかさに鉢が回ってきたというわけだ、蘭豹曰くAランクで扱いやすいし、そのほかの技術も取得している、おまけに腕も立つからこういった仕事にはうってつけだと言っていた。

「これが終わったら休ませてもらうからな・・・明らかに超過勤務だろ・・・」

「影明、若干死亡フラグ立ってるよ」

現在リトルバードはお台場の上空を飛行しているが、現在は作戦で使ったミニガンから着脱式のベンチシートへと変更されている。

『うひゃー！かーくん、これすっごく楽しいね！..!』

現在ベンチで騒いでいるのは探偵科イソケスタの峰理子。影明やつかさと同じ2年A組のメンバーで変なあだ名で呼ぶ癖がある。かーくんもその一つらしい。リトルバードの外のベンチに座らせたのは失敗だった、と影明が軽く後悔している。

「落ちるなよ・・・落ちても知らないからな」

『そこはちゃんとして助けてくれるって信じてるよかーくん』

そんなことを話している内に潜伏先と思われるホテルの屋上に到着する。探偵科インクスタの生徒はある程度武器が使えるので先に突入して中の安全を確保。その後鑑識科レブアの生徒が調べに入る、という手順だ。帰りは近くで任務から武偵高に帰る途中の車輛科ロソのトレーラーにリトルバードを乗せてくれるらしい。

「各機屋上に到達した、行くぞ！」

今回は影明とつかさも突入要員として参加する。N4を持ってビルの屋上から突入する。他にも武偵高のへりからラッピング用のロープで数人の探偵科インクスタの生徒が降下する。目的の部屋は22階にあった。

「・・・行くぞつかさ、3、2、1」

「GO!!!」

ドアを開けて中へと踏み込む、既に犯人は撤収したあとらしい。

「トラップの類はないらしいな」

「みたいだね」

「よし、ここから先は探偵科インクスタと鑑識科レブアに任せる。無いとは思って何かあったら呼んでくれ」

そう言って2人が部屋をあとにする。車輜料ロツのトレーラーがやってきたのでリトルバードをトレーラーに乗せる。先に運んでくれるらしいのでトレーラーを見送ってからホテルの玄関近くで待つことにした。

「影明、今回のバスジャック・・・どう思う？」

「狙う時間帯からみれば、かなり悪質だな。一歩間違えればあのバ  
ス軽く吹き飛んでただろうからな」

「それと、これって武偵殺しに似てないか・・・って噂が流れてる  
んだよね・・・」

「ああ・・・そうか、武偵殺しか・・・」

そう言つと影明は鞆から封筒を取り出した。

「それは？」

「警察庁指定 広域指定137号事件の資料だ」

「それって・・・武偵殺しの？」

「ああ」

「どこでそんなの取ってきたの・・・？」

若干呆れたようになるつかさ。資料を交えつつ影明の話が始まった。

「日本に武偵制度が導入されてから3年、20XX年3月22日に東京武偵局の武偵がバイクに仕掛けられた爆弾で全治3ヶ月の大怪我をしたのが始まりだ」

「最初はバイクなんだ」

「2件目は9月18日、同じ東京武偵局の武偵が自動車に仕掛けられた爆弾で負傷、車は跡形もなく消し飛んだそうだ」

「・・・よく生き残ったね・・・」

「武偵殺しには謎が多い。目的も、要求もなかったんだからな。で暫くして犯人が逮捕された。犯人の名前は神崎かなえ・・・ん？」

「どうしたの？」

影明が若干首をかしげた。

「いや・・・最近似たような名前をどこかで見たような・・・」

「神崎・・・神崎・・・あ！」

「どうしたつかさ」

「この人って・・・神崎さんの母親じゃない!？」

写真の人物と、記憶の中のエリアを比べる2人、髪の色などは違うが、確かによく似ている。

「家族構成は・・・あつた、これじゃない？」

別のページに載っていた写真を見せる。今もなお裁判が続いているらしい。

「武偵殺しに関する資料は・・・これだけ？」

「ここに乘ってる範囲内では・・・な」

「ずいぶんと含みのある言い方だね、まだ何かあるの？」

「これだ」

「浦賀沖豪華客船沈没事故・・・これって、このまえの？」

「ああ、この前地獄に送ってやったバカの事件だよ。行方不明者リストのところを見てみる」

「武偵1名が行方不明・・・これって・・・」

「可能性犯罪つてあるだろ、ここまで巨大な豪華客船だ、もっと死人やら行方不明者が出てもおかしくないのに事故の規模に対して犠牲者が少なすぎやしないか？」

「・・・確かに・・・」

沈黙が2人の間に落ちる。あの事件で一時、武偵制度の撤廃などが真剣に国会で考えられていた時期もあったという。



「この国の国民は政府に不満をぶつけるだけ、あの事件に関してだつてクルージング会社にあおられたバカどもが裁判を起こして不満を言うだけ言つたら満足するような終わり方だつたら？自分の言葉に責任を持たず、自分の頭で考えようともしない、そんなのだからこの国はクズだつて外国から言われるんだよ……」

「私も・・・時々そう思うことがあるよ。中学の頃、私たちのクラスにモンスターペアレントが来てね。近くにいた私に絡んできたの。『こんな下品な生徒のいるような学校で内の娘は学ばせられませんつて』多分無意識だつたんだろうけど、無責任だよね……」

「で、どうした？つかさのことだから鼻の骨でもへし折つてやったか？」

「ううん。娘諸共鼻水垂れ流して『ごめんなさい』つて言うまでボコボコにしてやった。確か娘のほうは・・・右足が複雑骨折、母親の方は両腕脱臼させてから、両足が使えないレベルまで痛めつけて、父親はあばら全部折っちゃったかな。若気の至りつてやつ？」

「おおおう、傑作だな。俺でもそこまでやったこと無いぞ」

爆笑する影明、一般の生徒なら咎めるところなのだろうが、むしろおもしろがつている。

「嫌いになっちゃおう？」

つかさがいたずらっぽく微笑んだ

「いや、悪くないな。思い上がったバカには暴力が一番効く……さて、そろそろ学校に帰るか」

「りょーかい」

若干場の空気が柔らかくなった。しばらくするとエレベーターが開いて撤収していく鑑識科レヒアや探偵科インケスタの生徒達と共に2人も武偵高へと帰って行く。

「それと、アサルトライフルは近い内に持って来てもらうかな」

「わかった、ありがとう」

いつの間にか夜になっていたらしく、雲が晴れて月が地上を照らしていた。その中を2人が帰って行く。長い1日がようやく終わろうとしていた。

## 第8話 武偵殺し（後書き）

主人公とメインヒロインですが数本頭のネジが飛んでいってます。十中八九悪役ですね。キンジ達を基準に考えた場合はそうなります。ネジの飛んでいった者同士、惹かれあうところがあるのかもしれない。

しばらくは受験もあるため更新がストップしてしまいます。『そんなこと書く前に受験勉強しろよ！』というツッコミはなしの方向でお願いしますね（笑）それでは、感想お待ちしております！！

## 第9話 台風之夜

強襲科<sup>アサルト</sup>では、基本的にノルマをこなしたあとは自由とされている。これは戦闘中発生しうるあらゆる可能性に臨機応変に対応するための訓練なのだが、蘭豹なんかはこれを悪用して、5分ほどで終わるノルマを出して自分はどこかでサボっている。こういふときだけ蘭豹は頭がよく回る・・・と感心せずにはいられない影明だった。現在影明とつかさは強襲科<sup>アサルト</sup>専用の射撃演習場にいる。現在つかさが使っているのはH&K HK417なんのことはない、HK416は5.56mmだったがHK417は7.62mm・・・口径が大きくなっただけだった。つかさ自身も納得しているらしい。

「俺も、7.62mmの銃に変更するかねえ？」

「いいんじゃない？」

「こんど、SR-25平賀に頼んでカスタムしてもらおうか・・・」

「そついえば、影明<sup>アサルトライスカイパーライフル</sup>ってARとSR以外にどんなの持ってるの？」

「ん？SG<sup>ショットガンサブマシンガン</sup>、SMG、LMG、アンチマテリアルライフル・・・くらいだな」

「それは日本国内で撃って大丈夫な代物なの？」

「自分の頭に坑開けられるよりは遙かにましだと思わないか？」

日本はアメリカと違って銃器に関する規制が厳しい、アメリカなら腕のいい狙撃手はその手の雑誌のトップを飾り大手の銃器メーカー

ーがスポンサーに付くことだってある。だが日本ではそういったこととはない、むしろ銃を忌避するような傾向だ。

「警察にしる、この国の武偵にしるハンドガンとSMGだけで犯罪者を制圧出来ると思ってる連中が多すぎる。一応最近じゃ犯罪者サイドもある程度武装してるからな。警察の護送車なんか5・56mmでも孔が開くぞ」

「あ、それはこの前聞いた。たしか車輛科ロの護送車が武装した強盗に襲われてレインボーブリッジの上で横転したやつでしょ？」

「実際見てるなら話は早いな。だから俺はここまで過激なんだよ」

「なるほどね〜」

そういつつ2人は出てくるターゲットを撃ち倒していく。

「そういえば、昨日から神崎見てないな」

「あ、たしかに」

マガジンチェンジ、新しいマガジンを送り込む、喋っていてもだらけていないし無駄がない。プロの動きだ。

「あとでキンジにでも聞いてくるか」

その時、急に校内放送が入った。

『矢崎影明くん、服部つかささん、至急教務科マスターズまで来てください。繰り返します・・・』

いきなり2人の名前が呼ばれた、嫌な予感しかない。

マスターズ  
教務科 14:35

武偵高でも危険な場所ランキングに入っている教務科マスターズの扉を叩く2人。

「失礼します」

「おう、入れや」

蘭豹の声がしたので部屋の中に入る。そこには蘭豹ともう1人ス  
ーツ姿の男がいた。

「じゃあ、説明すつぞ。今から20分ほど前、こちらにいるヴァン  
デイン・ネクスト・コーポレーションの社長の息子が拉致された。  
相手はかなりの重武装だから普通の武偵を送り込んだら間違いない  
死体になる、そこで、お前らの登場だ任務の内容はわーってるよな  
？」

「そこに突入して奪い返してこいってところですかね？」

「そつだ。出来る限り早くな！」

「武装の度合いは？」

「・・・何でも使え。人質以外は傷つけても大丈夫だ」

「了解、すぐ準備に掛かります」

そういつて、部屋を出る2人。

「で、影明。どうするの？」

「重武装でいいつて言つんだろ？」

「うん」

「じゃあ、戦争だ」

そういつてえげつない笑みを浮かべる2人。誰が見ても一歩引いてしまふような、頭のネジがぶつ飛んでる人間がする笑みだった。

装備科 アムド 専用ロツカー

装備科アムドのロツカーから次々と装備を出していく。今回使用するの  
は・・・バレットM82A1カスタム、アンチマテリアルライフル  
の中では装弾数が多い。影明のバレットは標準装備されている2脚ハイボット  
を外してダネルMGLを銃身に装備している、もう一つの武装はM  
PSAA-12、外見は何とも言えない微妙なデザインだが、威力  
は凄まじく、フルオート射撃も出来る専用の32発入りドラムマガ  
ジンの他にフラッシュライト一体型グリップも装備している。銃の  
フレーム全体に米軍が使用しているAPC迷彩がペイントされてい  
る。

つかさは影明から渡されたベネリM4スーパー90と、アメリカ  
軍で採用されている分隊支援火器M249、ショットガンとLMG  
というかなり過激な武装だった。それ以外に影明はいつも通りN4  
を持って行く。ハンドガンはいつものものを持っていく。防弾制服

の上に影明は黒、つかさは白の防弾ロングコートを羽織ったら準備完了だ。

「さて・・・始めるか」

「りょうかい」

V-MAXに乗ってバイクを走らせ始める。社長の息子に持たせていたGPS付きの携帯電話で位置が特定できた。GPSの電源を切っていないところを見ると、どうやら相手は素人の集まりらしい。誘拐をするときは自分の位置がばれるようなもの・・・この場合は携帯の電源を切っておくべきなのだがそれすら出来ていない。場所は羽田空港内の使われなくなった航空機整備場だった。台風が近づいているらしい。雨がいつの間にか雷雨になっていた。



## 第9話 台風之夜（後書き）

さてようやく1巻も佳境に入ってきました。時間的にはキングが理子とエステーラにいる頃ですね、次回はちよつと気合いの入った銃撃戦になるかもしれせん。お楽しみに！！

第10話 銃弾演舞（前書き）

大変長らくお待たせしました、申し訳ありません！！

## 第10話 銃弾演舞

雨の降りしきる中を重武装の2人がバイクに乗って駆け抜ける。

「もうすぐ目的地だ、準備は？」

「ばっちり！」

そういつて笑顔で答えるつかさ。こういつときの彼女は本当に生き生きとしている。

「さて、行くぞ」

バイクを降りた直後、V-MAXに大量の銃弾が直撃した。燃料タンクに引火するとマズイので距離を取る。近くにあった整備用車輻の影に2人は身を隠した。

「ああ・・・」

悲しそうに呟く影明だったが・・・

「テロリスト風情がよくも・・・よくも、俺のV-MAXを潰してくれたな!!」

ライフルケースからバレットを抜くと、銃撃のあった方へ向けて12.7mm弾を撃つ。慌てて出てきたところにつかさがM249で脚を打って動けないようにする。テロリスト側も反撃してくるが有効打になっていない。影明のバレットに装備されたグレネードラ

ンチャーが火を噴いた。次々とテロリストを吹き飛ばしていく。整備用車輛から離れて2人は堂々と敵の前に姿を現した。整備場の前にはバリケードが出来ていたが容赦なくバリケードを砕いて前進する。

「・・・教祖様はお前ら風情に負けはしない・・・権力にしつぱを振る走狗め・・・世間が許しても、我らは貴様らを」

「うっさい」

何か言おうとした構成員に容赦なく至近距離からつかさが持つていたベネリの弾を食らわせる。暴徒鎮圧用の強化ゴム弾だが当たると凄まじく痛かったりする。整備場に入ると何十人ものテロリストが銃を片手に襲いかかってきた。明らかに2人に対する人数としてはやりすぎだが、それでもしないとこの2人は食い止められないと思ったのだろう。だが・・・。

「その人数で勝てると思ってるあたりまだまだだな」

「だね」

この二人は彼らが想像していた以上に化物だった。構成員たちは狩りになることを恐れていたがその心配はなかった、狩る立場と駆られる立場が見事に逆転している。十倍近い構成員たちを二人が一方的に狩っているからだ。

「死にたくなけりゃ、とつととボスのところに案内しろ」

試しに影明がそういったが動く気配は無し、強行突破決定だ。バレットを投げ捨ててMPS AA-12に持ち替える、接近してく

る敵にフルオートで散弾を叩き込んだ。つかさもM249をフルオートで撃ちまくる。接近していた構成員を倒してさらに奥へと進んでいった。

「しっかしこいつらどっから湧いてくるんだ？」

AA-12のマガジンをチェンジしながら影明はつかさに話しかけた。

「それは・・・考えるだけめんどくさくない？」

返ってきた答えは概ね影明の予想していたものだった。考えるだけ時間の無駄だ。

「確かに」

そういいながらも銃弾を打ち続ける手は止めない。接近して鉄パイプで殴ろうとしていた老人の脚を撃つ。AK-47を持って接近してきていたエリート学生らしい青年や女性を撃つ、ここにいる人間は世間に対して何もなかった人間だ。不平不満を言うだけ言っただけで警察や武偵に護られてきた人間達だ、それがどこの誰だか知らないが、その不満を煽って世間に対する怒りを増幅させてこういう行動に駆り立てた。同情する気なんて全くないし、こういうバカは死んだ方がいいとさえこの2人は思っている。それでも2人は武偵なので殺せない、だから、なるべく残酷で痛みの残る倒し方をする。その方が教訓になるからだ、だから影明とつかさは撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃ちまくる。弾丸の雨を降らせに行つてバカどもに鉛弾を叩き込む。気が付くと格納庫内には血を流しながら苦しむテロリストの姿だけだった。並の武偵なら拒否反応が出そうなものだがこの二人はそうではなかった。

「結局いつものブラッドバスか」

「ほんとだね」

埃っぽい格納庫を歩きながらそんなやりとりをする。外では雨が打楽器のような音を立てて降っていた。

「にしても・・・親玉はどこ行っただらろ？」

つかさがそんな疑問をこぼした、この二人がここに来たのは誘拐された社長の息子の救出とインチキ宗教団体の壊滅、その指導者の捕縛だった。一つめの依頼は難なく片付いたが二つめの依頼がまだ完遂されていない。この羽田空港のどこかにいるはずなのだが・・・そう二人が考えていたとき、影明があるものを見つけた。

「なあ、つかさ。あの小型機・・・怪しくないか？」

影明が指さした先にあるのは今にも離陸しそうな1機の小型旅客機。慌てて数人の人間が乗り込んでいる。そしてその飛行機の周りには学生や老人がAK-47で武装していた。そして大慌てで白い服を着た50歳代の男が急いで飛行機に乗り込んだ。

「あれが教祖様・・・じゃない？」

「かもな」

そう言うと、弾丸の切れた銃を捨てる。影明はゴールドコンバット？、つかさはGSRを両手に持って突撃を開始した。二人の接近に気がついた数人の信者が彼らに銃を向けるが相手が撃つよりも早

く、二人の銃が信者に叩き込まれた。タラップを掴んで機内に突入する。座席に座って一安心していた教団の幹部達を銃弾で黙らせた。近くには写真で見た子供が座っている、やはり親玉とセットで動いていたようだ。すると、教祖らしき優男が激昂して銃を取り出した。歌舞伎町あたりで安売りされていそうなりボルバーだ。

「君たちは本当に武偵か!? 私たちの信者に何のためらいもなく鉛玉を撃っておきながら・・・!」

「信者を都合よく利用していたやつとは思えない口ぶりだね」

つかさがGSRを構えながら言った。

「私の信者を撃つた事を何とも思っていないこんな輩が多いから日本の犯罪は減らないんだ! いっそのこと武偵などという思い上がった連中が多いからこの国はいつこうに平和にならないんだ!」

口から盛大に唾を飛ばしながら教祖が叫ぶ。

「じゃあ、この前台場でドンパチやらかしてたのって武偵校を潰すためだったんだ」

「それ以外に何がある!? 刀で斬ったり銃を撃つしか脳のないサルドモの巣窟をたたきつぶして何が悪い!!」

「つかさ、そろそろ面倒になってきた。黙らせるか」

影明がそう言うと同時に教祖に向けてゴールドコンバット? を撃つた。情けない悲鳴を上げながらのたうち回る教祖の男。

「じゃあ言っておいてやる。お前みたいなアホな考えの奴らが減らないからいつこうに犯罪は減らないんだよ。また蘇ってアホなこと企んでみる、今度はお前の前進に弾丸叩き込んでその不細工な顔を整形してやるからな」

「鉛玉で整形してもらったらちょっとは考え方変わるんじゃない？」

二人がそう言ってさらに教祖に弾丸を撃ち込んだ。痛みのみならず教祖が意識を手放す。飛行機のパイロット席にいた操縦士も捕まえて探偵科インケスタと尋問科タギユラに引き渡す。誘拐された会社の息子は気を失っていた。万が一ということもあるので衛生科ステイカの生徒にも来てもらった。気絶していて助かったと影明は思う、子どもには刺激の強すぎる光景だからだ。

「さーて、ようやくおわったね!!」

つかさが大きく伸びをした。雨脚は空港に来る前より激しくなっている、鑑識科レヒアの護衛も兼ねて、二人が周囲を見渡していると……いきなり自衛隊の車両が何台も空港の敷地内に入ってきた。普通のトラックに紛れて03式中距離地对空誘導弾を装備した車両まである。

「ねえ、影明。あれって……対空車両だよな？」

「よく気づいたな、しっかし嘛ー、なんだっていうんだ？」

コートのポケットからPDAを取り出して武藤に掛けた。

『影明か、どうしたんだ？』



「どーしたもこーしたもねーよ、武藤。今羽田にいるんだが・・・いきなり自衛隊がやってきたぞ？しかも中SAMまで持ち出してきてやがる。何かおきてるのか？」

『落ち着いて聞いてくれよ、ついさっき羽田を飛び立ったANA600便に武偵殺しが現れたんだ』

「ほー、それで？」

『・・・いうほど驚かねえんだな・・・まあいい、でその飛行機の中に、神崎とキンジが乗ってるって分かったんだ』

「ああ、大分読めてきた。その旅客機どこか損傷してるんだろ」

『ああ、4つあるエンジンの内、内側の2基が潰されてな。今引き返してるところだ』

「あらら、そりゃ大変だ」

武藤と話をしている間にも次々に03式が展開していく。それを見ている内にある可能性が影明の中で浮かび上がった。

「武藤、まずいぞ」

『何がまずいんだ、影明』

「陸自の高射特科が出張ってきてるってことは、連中、羽田（こゝ）には降ろさせないつもりだ」

『なんだと!?!』

「とりあえず、俺たちも今からそっちに戻る。今どこにいる?」

『2年1組の教室だ』

「了解、そこで待ってるよ……つかさ、やばいことになりそうだから戻ろ!」

「なにがあつたの!?!」

「時間がない、車の中で話す!」

PDAをコートのポケットにしまいながら影明が言う。鑑識科ケンシカの乗ってきた車の1台を借りて二人は羽田を後にした。雨脚は、さらに強くなっていた。

## 第10話 銃弾演舞（後書き）

お待たせしました、第1巻も佳境に入ってきています。今回影明が使っていたバレットはブラックラグーン8巻でロベルタが持っていたタイプです。原作でもキンジがレキの持っていたノーマルのバレットを気にしていましたが、こっちはそれどころじゃない・・・凶悪すぎるだろ主人公（笑）メインヒロインのつかさもLMG持って盛大に暴れまくっていましたね。

1巻の内容はあと少しで終了ですので、少し話を挟んでから2巻の内容へ入っていききたいと思っています。では感想お待ちしております。それでは!!!

第11話 ハードランディング(前書き)

1巻終了まであと少し！

## 第11話 ハードランディング

武偵校についたとき雨はかなり激しく降っていた。校舎の前に止めて全力で階段を駆け上がり、廊下を激走する。

「武藤、戻ったぞ！」

「同じく！」

教室のドアを引くと数十人の生徒が無線機の前にかじりついていた。周波数は航空無線になっている。無線の向こうでは管制官達が慌ただしく動いている声が聞こえていた。

「戻ったか、影明、服部」

「武藤、600便は今どこを飛んでる？」

寄せられた机の上には東京湾を中心に東京、神奈川、千葉の地図と、リーダーが置かれていた。

「今は・・・ここだ。盛大に燃料漏れを起こしてるから羽田に戻ってきてる最中・・・」

現在飛んでいる地点は羽田空港からそれほど離れていない空域だった。だが、その時、無線に新たな男の声が割り込んできた。

『ANA600便。こちらは防衛省、航空管理局だ。羽田空港の使用は許可しない、現在自衛隊によって封鎖中だ』

「何いってやがる！」

武藤が無線に向けて咆えた。

『誰だ』

「俺は武藤剛気、武偵だ！600便は燃料漏れを起こしてる、飛べてあと十分なんだよ！代替着陸なんてどこにもできない、羽田しかねえんだ！」

『私に怒鳴ったところで無駄だぞ、これは防衛大臣による命令なのだ』

冷酷に言い放つ航空管理局の局員。影明が武藤から無線機を受け取ったそのとき……。

「みんな！レーダーを見て！！」

レーダーにかじりついてたつかさがいきなり叫んだ。クラス中の生徒がレーダーの前に集まる。

「どうした、つかさ！？」

「……なにかが高速で接近してる……速いよ！！」

レーダーに表示されているのはついさっきまで3機だった。AN A600便とその誘導機であるF-15J、だが今はそれに加えもう一つ光点が増えていた。つかさの言うとおり信じられないスピードで3機の方に向かっている。この速さは……戦闘機だ。

『何を言っているんだ？こっちのレーダーでは何も・・・』

その直後、3つあった光点の内2つが消えた。影明達が窓の外に張り付くと闇に包まれた東京湾上空で2つ、爆炎の華が広がっていた。そして再びレーダーを見ると、光点はいつの間にか消えていた。どうやらステルス戦闘機らしい。

「護衛機が撃墜されたのか・・・」

『・・・やってくれたな』

忌々しそくに局員がつぶやいた。

「残念ながら俺たちのせいじゃない。旅客機もろとも始末しようとしたあんたらに天罰が下ったんだろうさ。あの散り方じゃ緊急脱出イジェクトする前に機体と一緒にさよならだろ、あんな命令をしなければあのパイロット達は死なずにすんだかもな」

そう言っつて無線を切つて武藤から携帯電話を受け取る。

「よう、キンジ。なにがあつた？」

『影明か。相変わらず冷静だな。ついさっき護衛のイーグルが撃墜された。こっちに被害はないよ』

いつもとは若干キンジの声のトーンが違つ、どうやら時折たまに見る覚醒モードらしい。

「そりゃどーも。羽田は封鎖中だとさ、どこに降りる？」

数分の沈黙の後、キンジが口を開いた。

『……メガフロートに降りようと思う』

その一言で、影明はキンジが何をしようとしているかを理解した。

「なるほど……『空き地島』の方に降りるんだな？」

『そうよ、あんたって頭もいいのね、馬鹿キンジとは大違いだわ』

「これは……キンジの彼女様じゃございませんか」

『ああああなたも風穴あけられたいの!!』

「それは勘弁して欲しいんだが……どうするキンジ、あそこにはまともな誘導装置がないぞ？」

影明の言う通り、空き地島には誘導装置どころか誘導灯すらない、一歩間違えれば乗客と共に600便は東京湾に沈む。どうすべきか……そう思っていたとき武藤が立ち上がってクラスに残っている面子に指示を出した。

「全員アムト装備科にいつて懐中電灯と照明機材借りてこい!!」

「わかった!!」

「まかせろ!!」

互いにそう言いながら次々と教室を出て行く生徒達、武藤もそれ



に続いて教室を出る。

「つかさ、俺たちもいくぞ」

教室を出て、<sup>アムド</sup>装備科の建物へと駆け出す二人。

「何を取りに行くの？」

「つい最近平賀にあるもののテストをしてくれって頼まれてな。それのテストをしに行こうと思う」

「あるものって？」

「AT-4 やスティングアーでも発射可能な照明弾だ。テストにはちよつどいいシチュエーションだろ？」

「なるほどね」

そう言いながら<sup>アムド</sup>装備科の建物に駆け込む二人、レインコート姿の生徒の中から文を見つけ出した。

「どうしたのだ？」

「平賀、この前の照明弾のテストをしに行ってくる。弾はあるか？」

「おお、いよいよテストなのだ！」

嬉しそうに平賀が言う。照明弾と発射用のスティングアーを抱えてついでさつき、校舎の前に駐めた車に乗り込んだ。フルスピードで高速道路を走る。レインボーブリッジ近郊は警察が封鎖していたが何

とか通り抜けて橋の中央へ。

雨が降りしきる中、600便の翼端が見えてきた。都内の明かりで機体が何とか見えている上にかなり低高度で飛んでいた。ステインガーに照明弾を装填して、車の外に出る、雨が二人を濡らすかそんなことは気にしない。PDAはキンジにつなげる。

『影明か？』

「おう、今から明るくしてやるからな。しっかり降りて来いよ、撃て！！」

「まかせて！！！」

二人のステインガーから同時に照明弾が放たれた。600便の遙か上空で照明弾が輝いた。

『見えるわ！いけるわよバカキンジ！！』

「下でお前らを待つてる奴がいる！きつちり決める！！！」

『言われなくてもそのつもりよ！！』

アリアが影明達に咆える。轟音と共に600便が空き地島へと着陸した。そして……。

「あれ……止まらないんじゃない……」

「いや、止まるぞ」

影明が確信を含んだ声でそう言った。それと同時に600便が空

き地島の風力発電の風車にぶつかった。ようやく止まったところで緊急用の脱出用シートから次々に乗客が出てくる。生還を喜ぶ声があちこちから聞こえていた。

「ま、これにて一件落着つてところだね！」

「そつだな、もう何発か打ち上げとくか！」

再び影明とつかさがステインガーを構える。無茶苦茶な着陸を祝う花火のように空に向けて照明弾を打ち上げた。雨はいつの間にか止み、空には星が瞬いていた。

第11話 ハードランディング（後書き）

では、感想お待ちしております!!

第12話 独唱曲の友達（前書き）

1巻終了!!

## 第12話 独唱曲の友達

第1女子寮 21:26

その後、簡単な事情聴取を受けたアリアはキンジの部屋を後にして、女子寮の屋上で待っているヘリに向かっていた。このヘリに乗って沖合で待機しているイギリス海軍の空母まで飛んで、そこから艦載機でイギリスまで戻る。未練はあったが・・・仕方ないとアリアは思っていた。トランクを持って女子寮の屋上になると・・・そこには意外な人物がいた。

「あんだ・・・」

ヘリポートにいたのは武偵校の制服の上に黒い軍用ロングコートを羽織った少年・・・矢崎景明がいた。

第1女子寮ヘリポート 21:10

景明がメールで呼び出されたのはつい数十分まえのことだった。そのメールに従って屋上へと向かうと、ある男性が立っていた。

「よう、ジョーカー、元気にしてたか？」

「マクダヴィツシュ大尉、どうしたんです。こんなところで」

「ん？こいつらの護衛だね。こっちまで出張ってくることになった」

そう言うのにやりと笑うソープ。

「武偵殺しは結局捕まらなかった・・・か」

「すみません大尉」

「なに、お前が謝ることはないさ。お前が現場にいたわけじゃないしな。でも、お前だって使えたはずだろ？例の権限、少なくとも在日米軍くらいは動かせたはずだぜ？」

「一応ここでは『しがないAランク武偵』ってことで通しておきたいんですよ」

景明もへりにもたれながらそうソープに返す。

「お前も大変だな」

「ですね」

そう言って二人が笑った。

「そつちでは何か動きはありましたか？」

「現在は『魔剣』を最優先で追撃中だ。この前もエジプト近郊で追いついたんだが・・・な。取り逃がしちまった」

「確かエジプトってあの<sup>パトラ</sup>お姫様の根城じゃありませんでしたっけ」

「いや、今あの砂のお姫様は行方不明だし、どこにいるんだかね・・・」

そう言いながら空を見上げる二人、その時屋上の扉が開いてピンク色のツインテールの少女・・・神崎・H・アリアが現れた。

「やっぱりあんた、TF141の隊員なのね」

「ずいぶん前から知ってただろ。ホームズ家当主？」

「やっぱりばれてたわね・・・」

トランクをへりに積み込みながらアリアがそう言った。

「あいつのことはいいのか？いいコンビだったと思うんだが・・・」

「いいの、そろそろ出発しましょ、ここでの生活も楽しかったわ、あんたみたいなのとも知り合えたし、じゃあね、景明。それとつかさにもいっておいて、仲良くしてくれてありがとうって」

「分かった、そう伝えておく」

そういってアリアがへりの座席に座った、それと同時に他のスーツ姿の男達・・・ロンドン武偵局の武偵もへりに乗り込んでいく、メインローターが風を切り裂く音が響き始めた。

「またな、ジョーカー」

「了解です、大尉」

ソープがへりに乗り込んでホバリングし始めたとき・・・屋上のドアが開いた、肩で息をしている少年は彼の友人であるキンジだった。アリアに向けて精一杯叫ぶ。それを待っていたかのように、キ



ヤビンからアリアが飛び降りた、それをキャッチするキンジ、だが、連れ戻したがついていたロンドン武偵局の武偵達がロープで屋上に降下してきた。ソーブも一緒に降下してくる。

「キンジ、アリアをつれて走れ、時間稼ぎくらいはしてやる」

「ありがとうな、景明」

屋上からワイヤーを使って下りていくキンジを見送った。景明の隣にソーブが立った。

「どうする、ジョーカー相手はこっちの数倍の数だぜ？」

「俺達にしてみればいつも通りですよ。じゃ、行きますか大尉！」

「おう、遅れるなよ……！」

ヘリから降下してきたソーブと共に景明はアリアを連れ戻そうとしているロンドン武偵局の武偵に向けて駆けだした。

台風が過ぎ去った翌日、バイクが壊れたので久しぶりにバスで通学した。自転車を武偵殺しにこわされてバスで通学通学しているキンジとアリア。免停中の武藤と他愛のない話をしながら学校に向かう。だが、2年A組の教室に入ると・・・朝だというのにそこは戦場と化していた。数人の女子グループvsつかさという構成だ。女子グループの方はこのクラスで何度か見た顔だった。巻き添えを食らわないようにほとんどの生徒は教室の外に出て成り行きを見守っている。

「助けに行かなくていいのか。パートナーなんだろう？」

キンジがそう景明に尋ねた。

「あいつはそう簡単にやられるほどヤワじゃないさ」

「随分とパートナーを買っているのね」

アリアもことの成り行きを静かに見守っている。

「何よ、私たちとの関係を終わりにしようって言うの？」

「それ以外に何があるって言うのよ。群れることしか脳のない三流が」

「パートナーができたからって調子に乗らないでよ、このクズが！」

そう激昂しながら相手が銃を出す。SIGP226つかさが元々使っていた銃だ。だが、つかさはGSRを抜くことなく相手に迫る。相手の少女がひるんだ好きに銃のスライドをめいっばい引いてスライドをはずす、そしてマガジンキャッチを押し、マガジンを抜いた。時間にしてわずか数秒のことだ。だが、つかさは鮮やかな手つきで銃を分解、使用不能にした。そして・・・ようやく影明達が動く、つかさの隣に立って景明が宣言した。

「こいつは俺の相棒でな、今後手を出そうものなら・・・俺も一緒にお相手することになる。そうそう勝てると思うなよ」

そう言つと、すすごと女子達は自分のクラスへと帰って行つた。

「さて、つかさ、ここですつとお知らせがある。お前と友達になりたい奴がいるそうだ」

「誰？」

「あたしよ」

つかさの前に出てきたのはアリアだつた。柄にもなく顔を赤くしている。

「私、今まで友達なんて作るうとも思わなかつたし、いらないうって思つてただけど・・・あたしの友達になつてくれる・・・？」

「うん、よろしくねアリア！！」

「こちらこそよろしく、つかさ！！」

それと同時に朝の教室に盛大な拍手が響き渡る。こうして、彼らの新しい日常が始まつた。

## 第12話 独唱曲の友達（後書き）

第1巻の内容はこれにて終了です。これから戦姉妹の話を含んで、第2巻は原作に介入する気力がないためオリジナルストーリーになる予定です。……ちよつと意外なストーリーになるかもしれませんが、では感想お待ちしております。それでは！！

## 第12・5話 景明とつかさの戦姉妹育成日記

4月29日 東京都台場 倉庫 20:16

夜の帳が降りた倉庫街の中をあかり、志乃、ライカ、麒麟の4人が走る。彼女たちの後ろからは数十人の男達が迫りつつあった。

「前からも来てる、応援はまだなのかよ、あかり！」

ライカが弾の切れたM4をスリングで掛けながらサイドアームのSIGザウエルSP2022を目の前の敵に向かって撃つ、相手の落としたアサルトライフル、ベレッタR×4“ストーム”を拾う、弾薬の状態を確認してから再び走り出す、あかりがこのミツシヨンにでる前、装備科アムドから借りてきたM4CQB-Rを撃った。彼女たちが受けたミッションは夜の倉庫街の警備だったが、現場では武器取引の真っ最中だったため、こうして追われる羽目になってしまったのだ。既に武偵校には援助を求めるメールを出していた、教務科マスターズからの返事は近隣で活動中の生徒をすぐに向かわせるとのことだったため、彼女たちはその合流地点まで走っているところだった、ようやく目的地が見えてきた、そこに立っているのはたった二人だけだった。

「二人だけ!？」

あかりががっかりしたような声を出したがライカは違った。

「安心しろよあかり!あの二人ならそこらの強襲科アサルトの先輩よりもすごいぜ!」

「え……?」

あかりが再び目をこらしてその姿を見る片方の男は防弾制服の上に黒いロングコート、もう片方の女

の方は防弾制服の上に白いロングコート、東京武偵校であんな服装の人物は……あかりのなかではあの二人しか思いつかなかった。

数日前、台風が直撃した夜、たった二人だけでインチキ宗教団体を壊滅させ、誘拐された大手軍事企業の息子を救出した先輩……矢崎景明と服部つかさだった。景明が持っているのはアメリカ特殊作戦軍の要請によって製造された、M249の派生型、Mk-48

Mod0、口径はM I N I M I の5.56mmから7.62mmへと強化されている。レールにはA C O Gサイトにレーザーサイトと

バイボット

二脚、フラッシュサプレッサーに伸縮式のストックを装備していた。

つかさが持っているのはアメリカ海軍S E A L sに採用されたM6 O E 4の重心を短くしたモデル、Mk-46 Mod0、レールにはドットサイトにフォアグリップ、レーザーサイトを装備している。あかり達の後ろから迫っている敵に向かって二人がL M Gを盛大に撃ち始めた。二人の後ろには大型のバンが停まっっていて、既にスライドドアが開けられている。

「走れ走れ走れ!!」

「ゴールまであと少しだよー!」

どこか緊張感の欠けたその声を聞きながら四人はバンの中に乗り込んだ。あかり達が乗ったのを見届けると景明達もバンに乗り込んだ。

「よし、武藤出せ!!」

「任せろ!!」

景明の合図と同時にバンが倉庫街から猛スピードで発進する。

「・・・全員怪我とかはないよな？」

「ありません」

「わたしもです」

「あたしも」

「ありませんわ」

四人とも制服が汚れているくらいで大きな怪我などは見受けられなかった。

「全員無事で何よりだね」

バンがいつの間にか高速道路に入っていた。窓の外では港の灯りが流れているが見える。

「あ、矢崎先輩、服部先輩」

急にあかりが思い出したかのように口を開いた。

「ん？」

「どしたの？」

「私たちのクラスに、先輩達と戦姉妹契約したいって娘がいるんですけど……」

「はあ？」

この二人にしては珍しく、間抜けな返事が返ってきた。

4月30日 東京武偵校 強襲科第3射撃場

アサルト

昨日の救援要請から一晩経った次の日の5時間目、景明とつかさ、アリアは射撃場にいた。蘭豹はいつもの如くどこかへ行ってしまっている。現在は射撃場で射撃訓練をしている最中だった。今日、景明が持っているのはM14EBR、アメリカ軍の正式採用銃のひとつであるスプリングフィールドM14の近代改修モデルだ。

「景明、昨日はあたしの戦姉妹を助けてくれてありがとうね」

「ああ、それについての報告なんだが、昨日ライカが持って帰ってきた銃、気づいてるかも知れないがイタリア製だ」

「報告書は読んだわよ、ちょっと妙ではあるわね」

「……どこが妙なの？」

銃関連の話題に弱いつかさが見えた。

「ベレッタってのはイタリアの銃器メーカーなんだがいろんな会社を取り込んで世界でも有数の大手銃器メーカーになった。そのベレッタ社が最近開発したアサルトライフルが昨日ライカが奪ってきたRX4ストームなんだが……」



「そう言えば、これまでのテロリスト連中って確かほとんどがロシア製の武器だったよね」

「そうだ、それにあの銃はまだそれほど値段が安くなってない、少なくともあれ一つでAKのデッドコピー品なら3つは買えるはずだ」

「つまり、そこまで高性能な銃を買えると言うことは・・・」

「何か巨大な後ろ盾があったりするのかもしれないってことだ。確証はないんだがな」

そう言っつて再び射撃に戻る景明。

「それと聞いたわよ、あなたの戦姉妹になりたいって娘がいるって話」

景明が珍しく的外した。よほど気にしているらしい。

「へえ、矢崎君にも、そんな話があったんだ」

不知火が面白そうに言う。

「私もいるけど意外と楽しいわ。そうだ、その候補の娘って確かあの娘と同じクラスだったわね・・・」

そんなことをつぶやきながらアリアが携帯を取り出してどこかにかけ始めていた。しばらくすると、

アリアの戦姉妹である間宮あかりが二人の少女を連れてくる。一人

は艶のある黒髪を侍ポニーテールにした少女と、ダークブルーの髪をツインテールにして眼鏡をかけた少女だった。

「ありがとね。で、あかり、この二人がそうなの？」

「はい、そうですよ。こっちのポニーテールの娘が北条小夜子ちゃんで、こっちのツインテールの娘が古河茜ちゃんです！」

紹介された二人がぺこりとお辞儀した。

「で、どっちがどっちだ？」

「わ、わたしが矢崎の戦男妹候補で」

「わたしが、服部先輩の戦姉妹候補です！」

小夜子と茜がそう言いきった。

「ま、とりあえずどんな銃を使ってるか・・・だな」

景明が二人にそう言うと二人が背中に背負っていたケースから銃を取り出す。小夜子を使うのはベルギーFN社の新型アサルトライフル、SCAR-H。7.62mm弾を使用するタイプで既にオプションパーツは装備されている。腰のホルスターに納められているのはSIGザウエルP239シルバーライドという装備だ。茜の方は、FN SCARを狙撃用にしたモデルのSCAR S SRと日本警察やSPでも使用されている小型のハンドガンSIG P232 SLを取り出した。

「いい装備を使ってるな」

「あ、ありがとうございます」

景明に褒めてもらったのが嬉しいのか顔を赤くする小夜子。

「さて・・・つかさはどうする？」

「あたしはこの娘とエンブレムやってくるよ」

「俺は・・・とりあえずミッションにでも連れて行ってみる。そこでの成績次第ってところだろうな」

「何のミッションよ」

エリアが尋ねてきた。

「昨日、救出作戦をやったあの倉庫街の調査だ」

臨海部にある工業地区の一角を景明と小夜子に乗せたエルグラン  
ドが走る。昨日の件に関しては武偵校も気になっていたのだろう。  
すぐにミッションの許可が下りた。

「それはそうと、何で俺なんかと戦男妹になんかなろうとしたんだ  
？」

「えっと・・・前に助けてもらった・・・から、です」

「すまん、記憶にない」

「舞浜区のウォルトランド警備の警備で私を助けてくれたことですから……覚えてませんか？」

「ああ、本当にすまないんだが……覚えてない」

「そう言つと残念そうに肩を落とす小夜子。」

「本当にすまん……つとそろそろだ。準備しとけよ」

「はい」

エルグランドが倉庫街に足を踏み入れた。エルグランドを隠して車を降りる、ケースから銃を取り出す。N4とSCAR-Hを構える。あかり達が遭遇した区画へと歩いていく。解除鍵バンブキを使って倉庫の扉を開ける。暗い倉庫の中に二人の銃に装備されたライトの明かりのみが頼りだ。

「相変わらず木箱が多いな……何か見つけたか？」

「先輩……これ、見てください」

そう言つて小夜子が景明を連れて行く、そこにあつたのは大量の銃器だった。昨日見たベレッタR×4ではない、今回はFN F2000が大量に納められていた。

「これは……」

銃を一つ手にとつてみると製造番号が削り取られていた。

「おいおい……犯罪の匂いしかないんだが……」

「でも……これだけの銃を日本に運び入れて何をしようとしてるんでしょう……だって変じゃないです」

か。アサルトライフルをこれだけ搬入して……戦争かテロでもおっ  
はじめようとしているとしか……」

若干青ざめている小夜子。景明もそれは思っていた、普通、銃を  
密輸入するにしてもここまで大量には輸入しない、それこそ戦争で  
も起こそうとしている連中でもない限り……だ。

「先輩……私……怖いです……」

「……安心しろ、それが普通の人間の感覚だ。とりあえず、増援を  
呼ぼう……」

そう言いかけたとき通りの外で車が止まる音がした。

「どうしたんですか？」

「まずい……隠れるぞ」

そう言って、手近な物陰に隠れる二人、倉庫の前に止まった車はか  
なり大きいトラックだろう、静かに伺っていると、倉庫のシャッタ  
ーが開いて、屈強な男達が次々と銃の入ったケースを持って行く。

（あ、N4置いてきちゃった……）

そんなことを思っていると一人の男が景明のN4に気がついた、  
それを持ってシャッターの近くにいたリーダーらしき男の近くに持  
って行く。ここからでは何を話しているのかは聞こえない。だが、  
搜索をしないところを見ると昨日の戦闘で、あかり達が落としてい  
ったものだろうということの話がまとまったようだ。シャッターが  
閉まり始め、トラックが走り去ってから数分後、二人がようやく物

陰から姿を現した。

「何とかなつたな……」

「でも……銃は全部もってっちゃいましたね」

「そうだな、任務は継続不可能、戻るぞ」

そう言つて倉庫から外に出る。倉庫街は来たときと変わらず恐ろしく静かだった。だが……その静かさが二人にはとてつもなく不安を感じさせた。エルグランドまで戻る。武偵高に戻る途中、景明が小夜子にカードキーを渡した。

「先輩、これは？」

「俺の部屋の鍵だ。好きなきに使っていいぞ。これからお前は俺の戦<sup>アミカ</sup>男妹だよろしくな、小夜子」

「はい、よろしく願います。先輩!!」

心の底から嬉しそうな笑顔で小夜子が笑った。

第12・5話 景明とつかさの戦姉妹育成日記（後書き）

戦姉妹契約完了ですね、この話はある意味2巻のプロローグ的な感じの話です。2巻の話がどんな話になるかはまだここでは明かせませんが、ちよつと戦闘が多めの話になりそうです。感想お待ちしております。それでは！！

**第13話 重要参考人 矢崎景明（前書き）**

新章開始！今回は白石様の『防人の45口径』からタカが登場します！！



### 第13話 重要参考人 矢崎景明

5月13日 東京都内 23:45

一人の男・・・というより少年が道を歩いている、通りはだいぶまばらになってきたが、サラリーマンやOL、駅前にはキャバクラの客引きの店員が立っている道を彼は歩いていく。その少年がこの街にとけ込んでいるのはそのあまりに大人びた雰囲気と服装のせいだった。シャツまで真っ黒なダークスーツの上に、大型の真っ黒な軍用ロングコート、特殊部隊のブーツを製造しているメーカーにオーダーしてもらった特注品の軍用ロングブーツを履いて米軍でも使われている大型のシオルダーバッグを担いでいる。通りの向こうには警察官と東京武偵局の職員が検問を敷いている。少年は地図を取り出してその場所にx印を書き込むと再び歩き始めた。近くに駐めてある車に戻ってトランクを開ける。シオルダーバッグを二重底にかくして車に戻った。コートを脱いで仕事帰りのサラリーマンらしく、ビン底眼鏡を掛けてから車を発進させた。警察官が質問してきた。

「この少年を知りませんか？」

「いえ・・・こいつ、何をやらかしたんです？」

「先日の長官暗殺未遂事件の犯人ですよ。それではどうぞ、行ってください」

警官がGOサインを出すと同時に車が走り始めた。再びコートを羽織って眼鏡を助手席に放り投げる。バックミラーを見て追跡して

くる者がいないかを確認すると、少年……矢崎景明は大きく息をついた。

「やれやれ、面倒なことになった」

5月3日 武偵高 強襲科 屋外射撃場

あの台風の夜に起きた『武偵殺し』の事件以降、武偵高では穏やかな日々が続いていた。現在、景明は強襲科のレーンで射撃を行っている最中だった。

「よう、景明、練習か？」

その声をかけてきたのは同じ2年A組の同級生、鷹山勇治だった。こいつも一般生徒と同じように振

る舞っているが、裏の顔は陸上自衛隊の最精鋭とも言われる特殊作戦郡の一員で何度か秘密裏に海外に派遣されている。第二次朝鮮戦争では北朝鮮本国から脱出するTF141の援護に当たった。その縁で未だに親交が続いている。

「そついやタカ、この前89式お釈迦にしたんだって？後輩から聞いたぞ。何でも物理法則を無視した壊れ方したそうじゃねーか」

「一体何が起きたらそんな伝わり方をするんだ？まあ……大体あつてるけど」

「それはそうと、次に使う奴は決めてるのか？」

「まあ、そうだな・・・M4でも使おうかな・・・」

そうタカがつぶやくと、景明がケースから銃を取り出した。

「それなんかどうだ？」

「・・・これ、89式にRAS装備した奴だろ、俺もまだそいつ使ったことないんだぞ」

そう言いつつも、景明から89式を受け取って射撃を開始するタカ。

「そっいや、景明。N4はどうしたんだ？」

「あーアレか。この前奪われて・・・」

「例の倉庫街のやつか。確かにあれだけの銃が密輸入されたってのに足跡が見つからないんだよ  
な・・・警察も血眼になって捜してるらしいぜ。そろそろ自衛隊にも仕事回ってくるかもな」

89式を撃ちつつ、そんな笑えないジョークを飛ばすタカ。

「国内の治安維持に特戦群出してくるようじゃこの国も終わりだろ」

「ま、それもそうだな」

しばらく冷静に射撃を続ける二人。数十分ほど撃ってから近くのベンチに腰を下ろした。

「どつだ、結構いけるだろ」

「まあ、もうちょっと考えてみるさ」

そう言つてスポーツドリンクの入ったペットボトルを開けるタカ。

「そついや、今日景明が使つてた銃つてSR-25か？」

「いや、AR-10を徹底的にカスタムした。つい最近平賀から帰つてきたんだが・・・結構金が掛かったな、十・・・いや、十五万くらいか」

「結構金を積んだな・・・」

「これはある意味、思い出の品つてやつだから・・・気合いも入るわ」

そう言つて笑つ景明。AR-10とはユージン・ストナーが開発した銃の一つで正式名称はアーマーライトAR-10、後のM16の前身で、アルミニウムとプラスチックを多用した革新的なデザインで軽量化に成功している。景明が持っているのはその中でも民間用に連射機構を省いたモデル。現在でも使用は続いており、近代化改修を施したAR-10 SUPER SASSや、AR-10をベースに7.62mm NATO弾を使用するルイス・マシン&トゥール社製のLM308MWSなどが存在している。景明の使用するAR-10は16インチRASに固定式ストック、バイポッドとスコープを装備しているほか、ストックにはM24などに装備されるバットストックアモーチというものが装備されていた。そのポーチの外側にあるカートキヤリアには5発の弾丸が装備されている、装備しているのは武偵弾の一つ、徹甲弾<sup>ピエス</sup>。対超偵用の装備だ。

「そついや、最近『魔剣』が日本に入国したって話だろ・・・まだまだ休めるのは先になりそうだな」

疲れ気味に景明がぼやいた。

「確か明日は・・・げえ、警視庁と合同の護衛任務だ」

「誰か来るのか？」

「警察のお偉いさんだろ、誰かは知らないが・・・な」

PDAを見た景明が再びぼやいた。PDAを畳んでサイドポーチに戻してAR-10をキヤリー用ケースに収納した。そのまま装備科のロッカーへと収納する。腰のホルスターに収納してあったゴードコンバット？もロッカーに収める。

「んじゃ、明日は早いからな・・・先に帰るわ。奥様によろしくな」

「おー、じゃあなー」

武偵高の鞆を担いで射撃場の外に出る、時間はいつの間にか午後3時を過ぎていた。景明はゆっくりとバス停に向かって歩き出す。

翌日 8:45 台場

武偵高からそう遠くない台場で警察長官による宣言があるという。その護衛に武偵を使うのはいかがなものかと思うが、一応給料分

の仕事はすることにした。彼の服も武偵高の制服ではなく、私服のダークスーツにロングコートという出で立ちだ。お陰で私服警官の中にいても誰も質問してこない。景明の担当する場所は長官が演説する地点から数百メートルほど離れた場所だった。既に数人の私服警官やSATが待機している。今日の彼の武装はSIGザウエルP220Rだけだった。本来ならばアサルトライフルくらい持っていたいところだが許可が下りなかった。この部屋にいるSATは重装備で89式小銃を持っていた。

）(SATで89式の配備が進んでるのは本当だったんだな……)

そんなことを考えながら窓の外をのぞく、この部屋に詰めている刑事達は全く口を開かない。

）(……みんながみんな口下手ってわけでもなさそうだな。何を待ってる?)

そんなことを頭の片隅で考えていると……演壇に立っている警察長官が撃たれた。狙撃だと思った瞬間、後ろで銃を構える音がした。私服警官達が一斉に銃を抜いたのだ。

）(相手は3人+SATが2人……圧倒的に分が悪い、さーてどうしたもんか……)

そんなことを考えていると私服警官達が動いた。景明が迷わず一番近くにいた警官にP220Rの弾丸を撃つそれと同時に窓を突き破って外に出た。幸いなことに階が低かったことと落ちた場所がゴミ捨て場だったことでそれほど怪我は負わなかった。近くに路上駐

車していた乗用車のドアのガラスをグリッブで割る。鍵が刺さって  
いなかったので解除鍵でエンジンパンフキをかける。車を走らせながら景明  
は次に何をするかを考えていた。

（さうて、恐ろしく面倒なことに巻き込まれたんじゃないだろうな  
・・・）

武偵高 9：51 2年A組教室

2年A組の教室では1時間目の授業が終わり穏やかな休憩時間には  
はいつていた。武藤は机に突っ伏して寝ているし、アリアはキンジ  
と大声で言い争いをしている。つかさも何気なく携帯のフリッブを  
開けた瞬間クラス全員に武偵高の周知メールが来た。クラス中の生  
徒が携帯を開く。と同時につかさが倒れた。

「つかさ！？ちょっとどうしたの！？つかさ！」

「おい、服部！大丈夫か！？武藤、保健室まではこぶの手伝ってく  
れ！」

「お、おう！」

慌ただしくA組の生徒達が動き始める。机の上にあっただつかさの  
携帯に表示されたメールの内容はこんな内容だった。

『本日午前8時45分、台場で警視庁長官が狙撃、現在、警視庁、  
警察庁、東京武偵局は重要参考人として東京武偵高2年A組矢崎景  
明の身柄を捜索中。続報は順次連絡する』





第13話 重要参考人 矢崎景明（後書き）

予想の斜め上に行く始まり方で始まった第2章、ある映画の冒頭がモデルになっています。原作では2巻が始まる少し前の話ですね。では、感想お待ちしております。それでは！！

## 第14話 反撃の狼煙（前書き）

今回CODからついにあの人が登場！他にもタカの戦男妹、風蓮希が登場します！！

## 第14話 反撃の狼煙

五月四日 米軍横田基地 16:25

関東にある在日米軍の基地である横田基地に一機の輸送機が着陸しようとしていた。輸送機の発着自体珍しいことではないが、珍しかったのはその輸送機がイギリス空軍所属のものだったからだ。つい先日、ホームズ家令嬢をイギリスに送るため一機のC-17がこの基地に待機していたが結局令嬢は日本に残ることとなり、その輸送機は遠路はるばるイギリスへと戻る羽目になった。それから日を置かずに、またイギリス空軍の輸送機がやってきたとあっては何事かと疑わざるを得ないだろう。C-17の後部カーゴドアが開いて物資と共に一人の男が降りてきた。口元には黒い髭が伸び放題になっている。それを気にすることなく男は基地にあつたハンヴィーに乗り込んで基地を出て行った。男が向かった先は新宿にある東京拘置所、面会の予約は事前に入れてあるのですんなり通ることが出来た。面会室には既に女性が座って待機していた。

「面会時間は三十分です」

女性警官が男に一礼して去っていく。

「髭は剃らないんですね」

「剃ったら誰か分からなくなってしまうから、Mrs神崎」

「お久しぶりですね、プライス大尉」

神崎アリアの母親である神崎かなえが目の前に座っている男、TF141の指揮官でもあるジョン・プライスにそう言った。

東京都内 17:55

廃工場には数人のスーツ姿の男達が転がっている。全員が一様に防弾チョッキを着て、手にはハンドガン・・・制服警官が持っているようなリボルバーではなく、最近警察でも配備が始まったSIGザウエルP226、P230JやS&Wレディ・イーグルを持っている。

「警視庁特殊強行遊撃班・・・聞いたことのない部署だな」

その中央に立っている黒い男・・・矢崎景明はそうつぶやいて手帳を床に投げ捨てた。逃走を開始してから早数日、銃や弾丸の方は暴力団事務所を襲ってその都度調達しているが、さすがにハンドガン数挺だけで逃げ回るには限度がある、

東京都内各地に専用のセーフハウスを持っている景明はセーフハウスに数日分の食料と武器弾薬が常備されている。そこに行くためには脚があるので探している最中だったのだが、その仕事の最中に彼らに襲われ今し方全員沈めたばかりだ。なかなか装備が上等だったので貰えるだけもらっていく。と、外に車が止まる音と、人間の足音が聞こえてきた。咄嗟に近くの廃材の陰に身を隠す。廃工場に入ってきたのは武偵高の生徒だった。全員がC装備で手にはM4A1やM16A4を持っている。

(どこから誰かがタレ込んだ・・・か、やれない数じゃないな)

景明はすぐに判断すると物陰から姿を動かした。

希side

タカの戦男妹である、風連希。強襲科の生徒にして同じ強襲科のあかりやライカ、景明の戦男妹である小夜子とも仲がよかった。現

在彼らに与えられた任務は矢崎景明の確保だった。本来、普通の犯罪者を捕まえにいくのにC装備は使わない。だが、今回は教務科からC装備の装着は必須とされ武器も学校に保管されているARを持たされた。つまり、それだけ景明が危険だということだ。おまけに自分達の人数は20人、控えめな人数とはいえ少なくとも銃を持った犯罪者相手にこの数はおかしい。だが何度か彼の講習を受けている希自身は心のどこかで疑問視していた。

(この装備と人数で勝てるかな・・・?)

この任務に抜擢された一年の殆どは二年である景明を倒して名をあげようとしているが、そう簡単にあの先輩が倒されるわけがない、武偵高の中でも群を抜いて危険にして過激、解決手段が銃と銃弾といわれてしまうほど、彼の攻撃は容赦がない。何せ、通常の暴徒鎮圧に対して軽機関銃を担いでくるほどだ、最近は相方である服部先輩の影響が更に過激になったような気がする。台風一号が来た夜、アリアヤキンジの功績で埋もれてしまっているが羽田空港の航空機整備場に大手軍事企業の息子をさらったインチキ宗教団体50人以上をたつた二人で壊滅させたという。希自身、後日戦男妹であるタカにそのことを尋ねてみたがそれは誇張でもなんでもなく本当にたつた二人で50人以上いた武装集団を壊滅させてしまったという。そんな人物相手に勝とうなど夢想家もいいところだ、と希は思う。それに・・・

(私は先輩が容疑者なんてどうしても信じられないんだよね・・・)

いくら学内の評価が危ない人だったとしても希の戦男妹でもあるタカやキンジ達と話している姿、校内でつかさという姿、小夜子に戦闘のイロハを教えている姿・・・そのどれをとっても今回の事件に関する線が見えてこない。そうこうしているうちにチームリーダー

1の少年が20人グループを5人班4つに分けて工場内の搜索を開始し始めた。

「それにしてもいいタイミングである先輩事件起こしてくれたよな」

「そうそう、俺前からあの先輩なんかやらかすだろーっておもってたけど、ほんとにやらかしちゃうんだもんな〜笑えてくるぜ〜」

希が入っている第3グループのリーダーと副リーダーが笑いながら工場内を搜索している。

「俺はやらかしじゃないんだけどな」

そんなことが聞こえた瞬間、先頭を歩く男子が倒れた。黒い影が見えたかと思うと他の男子も次々と倒れていく。

「全く……盗ってくれと言わんばかりの豪華な装備だな」

M16A4を拾い上げながらそうつぶやく景明。ガタガタ震えている希に声を掛ける。

「おお、タカのところの、元気にしてるか？」

「あ、はい、してます」

「そうかそうかそれはそれで何より……ということじゃちょっと眠ってもらひんぞ」

次の瞬間景明の姿が消えた。背後に回られたと思った瞬間彼女の

意識は闇の中へと落ちていった。

数分後、突入してきた一年生達の意識を全員綺麗に刈り取ってから、景明は廃工場の外に出た。外では武偵高の生徒達を載せてきたバンが停められている。近くにあった一台のドアをノック、運転手が出てきたところで再び意識を刈り取って、車の外に引きずり出す。ポケットを探って車のキーとナンバーを取り出して、盗難車追跡システムのコードを解除。鮮やかな手つきで作業を進めていく。作業が完了するとバンは静かに走り出した。

東京武偵高 2年A組

アドシアードの準備が始まる中、つかさは心ここに有らずと言った雰囲気で外を眺めていた。それを眺めながらタカ、キンジ、武藤アリア、そしてタカの未来嫁である蓼光稀の姿もあった。

「ここ最近ずっとあんな感じだぜ・・・」

武藤が心配そうにつかさを見ているが今日ここに集まったのは単に彼女の心配をするためではない。五人が囲む机の上には一枚の写真と事件があった日の事件現場の地図があった。画像はそれほど鮮明ではないが部屋の中で89式を構えるSAT隊員と私服警官の姿がある。景明が落下する直前、PDAで撮った写真だ。この出所から探ろうと諜報科レザドや情報科インフォルマが躍りになっていくが特定は不可能だろうと五人は思っていた、素性を知っているアリアやタカともかくキンジや武藤、光稀も普段の彼を知っているので彼がこういったへまをしないことも重々知っていた。だから彼が位置の特定をされるかもしれないというリスクを冒してまで送ってきたこの写真には何か

意味があるよこの五人は考えていた。

「じゃあ、光稀、ここには誰一人としてS A T隊員を置いていないんだな？」

「うん、それに第一、矢崎くんが来ているなら真っ先に私のところに連絡が来るはずだもの、第一あの日、私がS A Tに許可したのはこっちだよ」

タカの確認するような口調、それに続いて光稀が一枚の写真を指さした。写真はドイツ、H & K社が生み出した傑作短機関銃M P 5、しかもフルオート機構を外したF Kというモデルだった。光稀はS A Tの一隊員であると同時にS A Tの作戦指揮も担っている。当然事件があつたあの日も配置の指揮を執っていたはずなのでこうして聞いているというわけだ。だが光稀はS A T隊員の武装は短機関銃であるM P 5 F KとS I GザウエルP 2 2 6以外の武装を認めていなかった上にあの現場に景明がきていたことさえ知らなかったという。ということはこの写真、明らかにおかしいのだ。本来配置していなかった場所にS A Tが現れ、武装も許可していない8 9 式を携行しているとなれば、じゃあこいつらは一体誰だという結論にたどり着く。

「アタシとバカキンジは白雪の護衛で忙しいから参加できないとして・・・どうする？願に頼んでFユニットでも動かしてもらおう？」

「流石にそれは過激すぎるだろう・・・あれを動かすと言うことは戦争が始まったと同義だから・・・特殊戦群動かす方がまだマシかもしれない、でもなあ・・・」

アリアが出した意見にタカが否定する。このクラスに所属するチ



ト魔神こと萩原願率いるFユニットを動かすとなれば防衛大臣の首がすげ変わることは必至だ。つい最近武偵殺しで、F-15J撃墜の責任をとって防衛大臣が辞職したばかりなのだ。これ以上日本国内でドンパチをやらかしたら間違いなく国民感情は悪化の一途を辿る。それならば動かし辛いとはいえタカの所属する特戦群を動かした方がいい。だが相手は一人とはいえ世界最強の座を守り続けている特殊部隊TF141の隊員だ、遅れは取らないだろうが、彼の場合、特戦群とはぐり抜けてきた修羅場の質が違う。かといって一般警察や武偵高の生徒に頼るようでは被害は拡大する一方だ。ついさつき、景明を追撃していた一年生が全滅した。20人全員がものの見事に意識を刈り取られていたという。タカが担架に載せられて救護科アンビュランスの生徒に運ばれていく20人を見送る。

「そのうち蘭豹からお達しがくるだろうからそれまで独自に調査を進めるってことでいいな？」

キングが綺麗に場を納めた。五人がそれぞれ別の方向へと駆け出していく。アリアがつかさに心配そうな視線を送ってから教室を後にした。

都内某所 景明のセーフハウス

暗い室内ではこの家の主である景明が大量の武器を机の上に出していた。ハンドガン、SMG、アサルトライフル、スナイパーライフル、LMG、使い捨て対戦車兵器、アンチマテリアルライフル、手榴弾、スモーク、フラッシュバン、C4、投げナイフ、コンバットナイフ、ククリブレード、日本刀、そして大量の機材や弾薬がセツトされていく。一人で充分戦争が出来そうなレベルだ。ハンドガンをサイドホルスターに、ナイフや爆発物関連はコートのポケットに仕舞う。そのほかの大型の銃器関連は車に積み込んでいく。ここ

まで乗ってきたバンは、今し方爆発処理したところだ。今までは逃亡するだけで反撃に転じることは出来なかった。だが、敵のおよその姿は見えてきた。

「さーて、反撃開始だ。待ってるよクソ共、今から行ってボコボコにしてやる」

景明がどこかの死ぬほど頑張るハゲでマッチョな警官のように不敵な笑みを浮かべた。

第14話 反撃の狼煙（後書き）

さて、反撃開始です!!

第15話 激闘(前書き)

あかりVS景明!!

## 第15話 激闘

5月9日 東京都臨海区 ウォルトランド周辺 19:56

夢の国として有名な東京ウォルトランドの近くにある本来ならばアトラクションの機材が納められている場所では今、銃撃戦の真っ只中だった。数十人の雇われヤクザやチンピラ達が相手しているのはたった一人の少年だった。ヤクザやチンピラの持つ銃はベレッタR×4ストーム、彼らが持つには新しすぎる銃だった。だが大した疑問を抱くことなく薬でラリっている彼らは目の前の少年に対して銃を撃ちまくる。だが、相手は単なる武偵ではなかった。少年の名前は矢崎景明、現役特殊部隊の隊員でもある。だから、彼は迷うことなく撃つ。薬でハイになっているバカ共の顔面に銃弾を叩き込んでいく。明日になればニュースのレポーターが『近年稀に見る悪党』などと言ってもてはやすだろうが、そんなことを気にしている余地はない。

つい先日無実の罪で警察と東京武偵局のメンバーに追いかけることになった景明だが、現在は反撃に転じていた。今日の夜ここに何かが運び込まれる予定だったというが彼が来てみると既に荷物は運び出された後、居たのは捨て駒としか思えないような三下連中だけだった。また、チーマーの眉間に穴が開く。景明が今使っているのは、レミントン社製スナイパーライフル、R S A S S。余り売れているとは言い難いがなかなか性能がいいので彼は気に入っている。狙撃用のスコープと近・中距離戦用のマイクロドットサイト、サウンドサプレッサーにバイポッドとスリングを装備している。プラスチック製マガジンには7.62mm弾が20発、相手の頭を撃ちぬくには十分な威力と貫通力を持っている。あらかた叩き潰したところでR S A S Sを後ろにまわしてサイドホルスターからH&K

社のハンドガンUSP45を抜く。既に銃にはレーザーサイトとタクティカルライトが装備されていた。工場内を搜索して何か手がかりになりそうな物を探す。数十分かけて探したが結局見つからなかった。ので撤収することにした。

「さて……次の目的地は……」

車に戻る途中、彼は新しい目的地を探す。

東京都内 ホテル

東京各地にある外国人向けのホテルの一室には神崎かなえと面会を済ませたプライスの姿もあった。現在は室内にある固定電話でソープと連絡を取り合っている。

「『魔剣』の行方は……カンボジアで途絶えたのか」

『そっだプライス、だが予想では日本に向かっているはずだ。そっちにはジョーカーが居るだろ?』

「あー、そのジョーカーなんだが、今警察に追いかけてらるらしい、ニュースでやってる」

『何やったんだあいつ』

「それを俺に聞くな。情報がこつちに来たらまた連絡する」

『了解だ』

そう言ってソープとの電話は切れた。

「あいつもあいつで大変だな」

プライスがそうつぶやいて旅行用靴から愛銃であるコルトM1911を取り出した。旅行用靴とは別に銃を積んできた靴からもH&K製のサブマシンガンUMPを取り出す。既にホログラフィックサイト、フォアグリップ、レーザーサイトが装備されている。

「さて・・・始めるか」

プライスがそう言ってUMPを仕舞う。靴を持って彼は夜の東京へと踏み出した。

#### 東京武偵高 グラウンド

景明の捕縛のめに向かわせた一年生の被害は日に日に増大していった。そして今日再編成が終わった1年生が出撃しようとしていた。全員がC装備で使用する銃はH&KG36C、ドイツ連邦軍で採用されているアサルトライフルだ。捕縛隊の中にはアリアの戦姉妹であるあかり、その友人のライカ、そして先日作戦にも参加した希の姿もある。小夜子は参加拒否、茜はつかさと共にいるのでここにはいなかった。車両科の大型トラックが3台、そして改造したBMWに護衛されてトラックは武偵高を出た。それをアリアは屋上から一人で監視していた。現在キンジは白雪の護衛に就いているため不在、武藤も車両科の免許取得のためにここにはいなかった。

「さて……そこにいるんでしょ、のぞきは感心しないわよ、つかさ」

「うわちゃー、やっぱりばれちゃったか」

屋上にある貯水タンクの裏からつかさが姿を現した。現在彼女はアリアと共に白雪の護衛に就いている。

「ホント、自分のパートナーが危機的状況だつてのに随分気楽ね」

「そう簡単に景明はやられないって信じてるからかな。だってわた・しのパートナーだよ？1年やそこらの武偵が掛かって勝てるわけじゃない……知り合いのチート連中に比べれば少しは見劣りするけど」

「それはそうだけどね……ま、いいわ、キンジの護衛の方はどうなってるの？」

「白雪を説き伏せて部屋の周辺にはセントリーガンを配置、キンジくんの部屋には至る所に法儀礼済みのクレイモアを設置、それと、景明のコネを使ってアメリカ空軍から無人攻撃機MQ-9リーパーを2機ほど借りてるよ。これくらいで大丈夫でしょ？」

「……さすがは過激派の相棒ね、やることが豪華すぎるわよ、っていうかりーパーなんてよく借りれたわね……でもこれくらいが丁度いいのかもね」

アリアが若干げっそりしているが納得したらしい。

「すっかり起爆装置を押さないように設定はしてあるはずだから大丈夫だとは思っけどね。それと、今し方レキと『鷹の目』を交代してきたよ」



鷹の目とはスナイパーの仕事を目指すスラングの一つで銃を使って対象の監視をするのが仕事だ。狙撃科では初心者向けの仕事だが、つかさ自身も景明と共に何度か『鷹の目』をしたことがある。

「ちなみに使ってる銃は？」

「チエイタックM200、景明の部屋にあったやつを小夜ちゃん経由で借りた、今はないけど小夜ちゃんもさっきまで手伝ってくれたよ」

「ホントあいつ装備が豪華ね……アタシも借りてこようかしら。あいつの戦姉妹の電番持ってる？」

「あるよー」

つかさがコートのポケットからスマートフォンを取り出して赤外線通信を行う。

「こつちも何とかしないとね、景明のことも何とかしないと」

「それに関してはタカくんが動くみたいだよ？」

「TF141隊員と特戦群のエースが激突か……見てみたいわね」

エリアが屋上から眼下の光景を眺めつつ静かにそう言った。

路肩から転げ落ちたバンが燃え上がっている。外には車内に乗っていた1年生達が応急手当を受けていた。応急手当を行ったのは景明出て当てを終えるとすぐにその場を離れた。トラックに乗ってい

た数人の生徒達はG36Cを構えて接近していた。M249パラトルーパーモデルにボックスマガジンを装備する。

「本当に懲りない連中だ」

それと同時に隠れていた場所から上半身を出して舐めるように射撃を浴びせる。数人が痛みで倒れた、何人かがこっちに向けて撃ってきたのでスタングレネードを投げつける。数分後光と甲高い音が響いて数人が視界と聴覚を奪われる、そこを逃さずにM249で射撃、動きを止めた。

別方向から接近していた3人に対しては腰のホルスターにあったP232を抜いて一人一発ずつきっちりお見舞いする。遮蔽物を変えて再び射撃、的確に人数を減らしていく。LMGを中心にハンドガンや爆発物も使った戦いを繰り広げる。M249の弾薬が無くなった。スリングで後ろに回してからステアーAUGを手を持った。オーストリア軍で採用されたブルバップ式のライフルであちこちにマウントレールを装備している。的確に弾丸を撃ち込みながら更に位置を変えていく。

既にトラック二つ分の1年生を潰したので残るはあと少し。そこで物陰から希が出てきた。持っているのはG36C、彼女が撃つよりも早く景明は投げナイフを投げつけた。希は景明が撃ってくるものだと思っていたので咄嗟のことに反応できない。ナイフに気を取られている隙にハンドガンで希を静かにさせた。その背後からG36Cを捨ててマイクロウージーをもったあかりとナイフを持ったライカが距離を詰めてきた。

「先輩、お願いですからおとなしく掴まってください!!!」

「だが断る!!!」

ライカの腕を蹴り上げてナイフをはねとばす間髪いれずにライカがもう一本のナイフを抜いた。景明も腰の後ろから両手にククリブレードを持つ。ライカが内懐にはいるべく一気に距離を詰めた。ナイフの機動を見切つて肘を顔面に叩き込む訓練のときのように手加減は一切無し本気の特務部隊員の一撃がライカに直撃した。鼻の骨が折れないように手加減したのだが、その影響でライカはナイフを取り落としてしまう。そこで景明が気を失わせた。そこにあかりが飛び込んできた。双方の動きが止まる。

「……間宮、お前があれだけ射撃が下手なものには理由があるだろ」

「理由なんてありません、単に下手なだけです」

「それだったら……どうしたらいい。お友達を撃つたら本気を出してくれるか？」

「……武偵は任務中に人を殺してはならない……9条にもそうあるじゃないですか！」

「それはどうか、さあ間宮、お前の力を見せてみる、大切な友人を守るために、大切な戦姉妹であるアリアを守るために、隠されたお前の本当の力を見せてみる……！」

悪役のような台詞と共に景明がP232を抜いた。それと同時にあかりの纏う雰囲気は今までは違うものへと変貌する。あかりがマイクロウージーを上げた。いつものおどおどしているときは桁違いの速度でマイクロウージーの狙いをつける。それと同時にあかりがいつものようにフルオートではなく2、3発に区切った短連射を行った。狙いは殆どが景明の頭部！

(やっぱりか!!)

迫り来る弾丸を避けて景明が反撃開始、ステアーを片手で撃つて相手を牽制しつつ、ククリブレードを振るう。あかりがそれを避けてひらりと宙返り、降りた場所には気を失った1年生が二人。その二人が持っていたG36Cのストックを折りたたんでアサルトライフル二挺撃ち、凄まじい勢いで遮蔽物に穴が開き始める。手榴弾をアンダースローで投げつけるとあかりは正確に二つを撃ち抜いた。精密機械の如き戦闘能力。

「やっぱりか、見直したぞ間宮！」

「こんな力……認めたくはない！！」

G36Cの弾丸が尽きると同時に次のG36の落ちている場所へと移動する。景明が前へと飛びだした。あかりの放つG36Cの弾丸を避けながら腰に装備されていた手榴弾を投げる、アンダースローではなく野球選手のような剛速球で投げつけたあかりが手榴弾を迎撃すると同時に煙が周囲に広がった、煙幕手榴弾だと気付いたときにはもう遅い、一度煙幕手榴弾の範囲外に脱出した。その直後、右手にP226左手にP232を持った景明が走ってきた。飛び穿ちて銃をもぎ取りに掛かる。だが、その動きに入る直前で景明が両手の銃を捨ててあかりに掌底打を打ち込んだ。あかりの動きが止まる。立て続けに打撃技を叩き込んで動きを止める。ふらふらになったところで脚を払って地面に転がした。あかりも体力を使い果たしたのか転がされても抵抗していない。

「済まんな、間宮」

「……先輩、私……強かったですか？」

「ああ、俺もびっくりだ。それと……9条破りは何もお前だけじゃ

ない。かくいう俺も9条破りなのさ」

「それは……どういう……？」

「詳しくは帰ってお前と同じくらいの背丈のお姉さんに聞いてみる。丁寧に教えてくれるはずだ。それと……ウチの戦兄妹とも仲良くしてくれ。よろしくな」

「はい、お願いしますね、先輩……」

それと同時に景明があかりの意識を刈り取った。この日景明は新たな伝説を打ち立てる。1年生といえど強襲科の生徒50人と渡り合ってたった一人で勝利したという伝説を。

そんなことはいざ知らず景明は新しいマガジンをステアーに差し、その場を後にした。

都内某所

プライスがUMPのライトをつけたまま工場内を歩いていく。少し気になった車を追いかけてこの場所に辿り着いたときいきなり彼は襲われた。だがTF141の裏ボスでもある彼が後れを取るはずもなく、文字通り返り討ちにした。襲撃してきたのは5人、その内3人はUMPで頭を撃ち抜かれた状態で倒れている。もう一人は自白させる途中にショック死、最後の一人も出血多量で死んだ。

別段、罪悪感を感じないこの業界は殺し殺され血を洗う業界なのだ。いちいち罪悪感を感じている暇もない。そのまま工場内にはいると更に二人の襲撃を受けたので頸骨をへし折ってその場に転がしている。

「しかしこいつらは自衛隊……だよなあ。へたすりゃ国際問題にも

発展するかもな」

口ではそう言いつつも彼はそうは思っていない。ここに転がっている死体の内5人は警察SATのOBだった。そして残りの二人のポケットを探って何か身分を示す物を探す。捜し物はすぐに見つかった。名前の下に所属している基地と配属部署が書かれていた。

「科学防護隊……？バイオテロ対策がメインの連中が何でこんなところにいるんだ？」

プライスの疑問に応えるものはなく。外にはただ闇が広がっていた。

武偵高 19:23

装備科から一人の少年が出てくる。武偵高の制服の上にはタクティカルベストとファアの付いたダークブルーの防弾コートを着ている。彼女であり未来嫁でもある美稀からの贈り物だ。大規模麻薬売買組織ブラックイーグルに囚われ、救出された戦いの後に武偵高の屋上に呼び出されて彼女から直に手渡されたコートだった。

縫ったときに針で刺してしまった傷だらけの手を隠そうとして、もちろんそんなことはすぐにばれてしまったが、彼女の思いと願いと愛情がまつたこのコートを彼は生涯大事にすると未来嫁に誓った。それを着ると言うことはそれだけ重要な戦いが彼を待ち受けているということでもあった。

友人にして同業者、自分の救出作戦の折にはたった一人で60人以上はいた元軍人、元傭兵で構成されたブラックイーグルの私兵軍団を全滅に追い込んだ彼を止めるためにタカこと鷹山勇治は行く。

車には既にM16A4と愛用のキンバーカスタム、そしてある人物の形見でもある銃を持って彼は行く。これ以上被害が広がる前に友

人を・・・矢崎景明を止めるために。携帯がメールを受信した。今は女子寮の自分の部屋で彼の帰りを誰よりも心待ちにしている未来嫁こと蓼美稀からだ。

『早く帰ってきてね』

なんてことはない文章、顔文字も何もないシンプルな文面からタカは彼女の思いを受け取った。

「ほんと、俺にはもつたいないくらいの良い嫁さんを持ったなあ」

そう言っただけで彼は車に乗り込んだ。向かう場所はあらかじめこちらから指定してある。

車は静かに走り出した。

都内某所 21:11

眼下には都内の夜景が広がっている。タカから電話が掛かってきたときは驚いたものだが考えは自分を連れ出すためだろうと彼は思った。義理堅いやつだ。だからこそあの未来嫁は彼にべた惚れなだろう。会合場所の近くに車が止まった。どうやら相手も着いたらしい。

景明はRSSASSのポルトを引いた。

「さて、戦争するか」

## 第15話 激闘（後書き）

景明VSあかりは景明の勝ちですかね。結構やばかったですが・  
・。さて次回はいよいよタカVS景明のガチの戦闘ですので。どうぞお楽しみに。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1644v/>

---

緋弾のアリア バレットダンサーズ

2011年11月28日07時47分発行